九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University

KSU
九州産業大学
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和7(2025)年度文化庁「Innovate MUSEUM事業」
「健康社会」実現を目指した、国際的「博物館浴®」ネットワークによる社会課題解決事業(中核館:九州産業大学美術館)
編集:緒方 泉(委員長・九州産業大学地域共創学部特任教授)
発行日:2026年3月31日
印刷:東洋紙業高速印刷株式会社

博物館が、人々を支える。

M u s e u M

令和7年度 文化庁「Innovate MUSEUM 事業」
実施報告書

「健康社会」実現を目指した、国際的「博物館浴®」ネットワークによる
社会課題解決事業(中核館:九州産業大学美術館)

(九州産業大学美術館<代表>、美濃加茂市民ミュージアム、北名古屋市歴史民俗資料館、おぶせミュージアム・中島千波館、
高鍋町美術館、中部国際医療センター、東洋大学、名古屋大学博物館、九州大学)

1 事業名及び中核館

「健康社会」実現を目指した、国際的「博物館浴 」ネットワークによる社会課題解決事業（中核館：九州産業大学美術館）

2 現状の課題

日本では超高齢社会、そして多死社会への加速度が増している。さらに、ストレス社会も厳しさを増している。児童生徒の不登校が約34万6千人（2023年度文部科学省調査）、15歳～64歳のひきこもりが約146万人（内閣府：2023年3月発表）と極めて深刻な数字となっている。

3 事業概要及び目的

今回は、高齢化対策、児童生徒対策で様々なプログラムを展開してきた。国内の博物館・美術館と連携し、大量の自律神経データが測定できる機器による実証実験を行う。実証実験での定量的評価にあたっては、医療機関、医療ビッグデータ調査企業の協力を受ける。また「博物館浴」研究をリードするロンドン大学（英国）、マチェラータ大学（イタリア）、そして英国、台湾の博物館等と連携し、英国の先進事例調査、国際シンポジウムを実施することで、「健康社会」実現に向けた、世界的な「博物館浴*」ネットワークの構築、そして日本における「博物館浴」プログラム開発、自治体への政策提言を目指す。

*博物館浴＝博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

4 事業のモデル性・先進性

①「博物館浴」の定量的評価に基づく基礎研究により、国内外の博物館・美術館が医療福祉機関・大学・企業と連携することで、博物館・美術館を単なる展示施設ではなく、人々の「健康・ウェルビーイング」を支える空間としての役割を強化することができる。

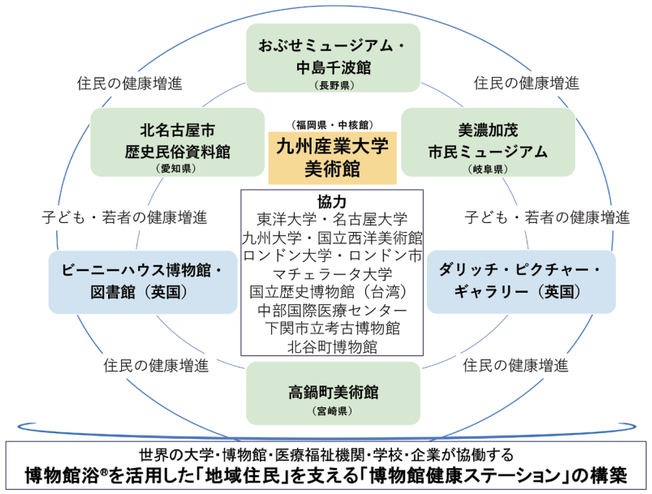
②国内外の「博物館浴」プログラム事例の共有を通じて、より多様なアプローチや手法を学ぶことができるため、国際的な「博物館浴」ネットワークの構築につながることが期待できる。

5 連携先と協力機関、事務局

①連携先：おぶせミュージアム・中島千波館（長野県）、高鍋町美術館（宮崎県）、美濃加茂市民ミュージアム（岐阜県）、北名古屋市歴史民俗資料館（愛知県）、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー（英国）、ビーニーハウス博物館・図書館（英国）

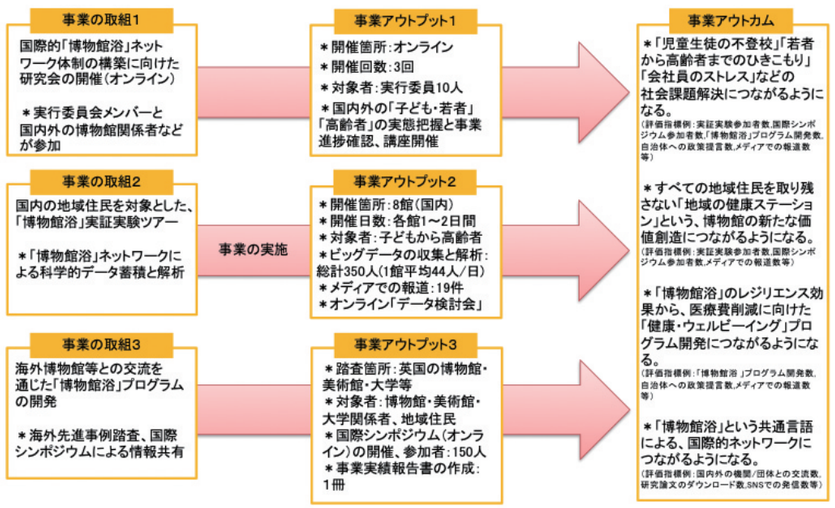
②協力機関：東洋大学（東京都）、名古屋大学（愛知県）、九州大学（福岡県）、国立西洋美術館（東京都）、ロンドン大学・ロンドン市（英国）、マチェラータ大学（イタリア）、国立歴史博物館（台湾）、下関市立考古博物館（山口県）、北谷町立博物館（沖縄県）、中部国際医療センター（岐阜県）

③事務局：九州産業大学産学共創・研究推進本部



世界の大学・博物館・医療福祉機関・学校・企業が協働する
博物館浴®を活用した「地域住民」を支える「博物館健康ステーション」の構築

「『健康社会』実現を目指した、国際的「博物館浴®」ネットワークによる社会課題解決事業」実行委員会の取組（ロジックモデル）



6 「博物館浴」ネットワーク研究会

オンライン「グローカル語り場」:「世界の仲間たちと『文化芸術による地域住民の支え方』を学ぶ」という名称で開催

オンライン「グローカル語り場」の表と裏

チラシ表面

チラシ裏面

【開催趣旨】

日本では高齢化率の上昇（世界第2位）やストレス社会（不登校児童・生徒約34万人、15歳～64歳のひきこもり約146万人）の課題が深刻化しています。

2023年に閣議決定された「文化芸術推進基本計画（第2期）」では、文化芸術が人々のウェルビーイング向上に果たす役割を提言しました。

ところで、ロンドン大学は、「文化芸術を鑑賞する機会が多い人は、鑑賞機会が少ない人に比べて死亡率が有意に低い」（Daisy Fancourt et al.,2019）という研究を報告しました。これを受けて、ロンドン市は「子ども・若者280万人の心」プロジェクトを開始し、文化芸術の場である博物館を活用したメンタルヘルス支援策が強化されています。また、高齢化率が日本に続いて世界第3位のイタリア、高齢化率が20%に迫っている台湾でも博物館を活用するメンタルヘルス研究が進んでいます。

こうした中、今回の事業で中核館となる九州産業大学美術館は、2020年9月から「博物館浴®（博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動）」の生理・心理的影響に関する研究を続け、2026年2月末までの実証実験で、全国100館（北は北海道・釧路市立美術館から、南は沖縄県・宮古島市総合博物館）以上の協力を得て、1,800人以上の科学的データを収集しています。

その結果、以下のことを検証しています。

1.見学時間が30分、20分、10分でもリラックス効果が確認された。

2.歴史系、考古系、美術系、自然史系など多様な館種でリラックス効果が確認された。

3.「低血圧」の人の数値が上がり、「高血圧」の人の数値が下がるなど、人の恒常性が働くことが確認された。

今回の事業では、世界的な「博物館浴」ネットワーク構築（イギリス、イタリア、台湾）を通じて、日本で行われる子どもや高齢者を支える取組を紹介、議論することで、日本における「健康社会」実現を目指した「博物館浴」の展開と自治体に向けた「すべての地域住民を取り残さない」、科学的根拠に基づいた「文化芸術によるメンタルヘルス支援」の政策提言を図ることを目的とします。

オンライン「グローカル語り場」進行方法

全3回の開催時間は90分とし、以下のように事例発表者の日本、そしてコメンテーターのイギリス、イタリア、台湾をつなぐ同時配信とする。基本的に最初の30分は事例発表者からの話題提供、その後はコメンテーターからのコメントと各国の事例報告。最後に事例発表者、コメンテーターからの感想を受け終了。

日本時間：17:00－18:30　　イギリス時間：9:00－10:30

イタリア時間：10:00－11:30　台湾時間：16:00－16:30

開催方法

Zoomウェビナー方式によるリアルタイム講座

オンラインにて日本、イギリス、イタリア、台湾を同時中継。

オンライン「グローカル語り場」のコメンテーター紹介

○ジェーン・フィンドレー（Jane Findlay）／
　イギリス：ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー

○ルカ・トレリ（Luca Torelli）／
　イタリア：マチェラータ大学

○黄　星達（Huang Sing-Da）／
　台湾：国立歴史博物館

「博物館浴」紹介映像の多言語版（英語）の編集

多言語版（英語）は下記のQRコードからご覧ください。

第１回

「学芸員の学び」から考える介護施設のアクティビティ

■ 講 師

手嶋 翔一（ホスピタグラン大濠公園/介護福祉士）

■ 講師から一言

博物館で実施されるワークショップと介護施設で行うレクリエーションの類似点と相違点に触れながら、認知症患者様への対応における留意事項やプログラムの提供法についてお話しします。

■ 開催日時

2025年9月12日（金）17:00～18:30（16:45～受付開始）

■ 受講者数

38名

■ 当日の記録映像

右のQRコードからご覧ください。

■ 事後アンケート

今日の学び、気づきを記録して、視覚化しておきましょう。

（黄さんの感想）

Thank you very much for organizing such a meaningful and successful study session today.

What impressed me most was realizing how countries around the world share a common concern for aging issues. While approaches differ, the emphasis on respecting emotional support for individuals is universal.

In particular, Japan and Taiwan, as super-aged societies in Asia, have already found

and are actively practicing meaningful solutions. As was said today:aging is not a problem but an issue — the key is not only how to solve it but how we choose to approach it with the right attitude and methods.

I was deeply moved by the valuable Asian perspectives and experiences shared today, and I believe they can provide new inspiration for Western countries as well.

I very much look forward to our next exchange.

本日は、このように意義深く、かつ大変充実したスタディセッションを企画・開催してくださり、誠にありがとうございました。

特に印象的だったのは、世界各国が「高齢化」という課題に対して共通の関心を抱いていることを改めて実感できた点です。アプローチは国によって異なるものの、個人への情緒的な支援を大切にする姿勢は普遍的であると感じました。

とりわけ、アジアにおける超高齢社会である日本と台湾は、すでに意義ある解決策を見出し、それを実践していることが非常に示唆的でした。本日お話にあったように、高齢化は「問題」ではなく「課題」であり、重要なのは解決することそのものだけでなく、どのような姿勢と方法で向き合うかだと思います。

本日共有されたアジアならではの視点や経験には深く心を打たれましたし、それらは西洋諸国にとっても新たな示唆やインスピレーションを与えるものになると確信しています。

次回の交流を心より楽しみにしております。

（ルカさんの感想）

I personally enjoyed very much being one of the three commenters and, thanks to your flexibility, I believe that I was put in the best conditions possible to share my thoughts. I hope that you were satisfied too.

My brief comment to our meeting could be: "During the first study session I've discovered many interesting practices, but above all I felt the connection that creative ageing activities can create between different countries such as Italy, Japan, the United Kingdom, and Taiwan, bringing us together and learning how to take care of the elderly".

During the month of November I will be in Japan, and I hope that there will be the chance to meet you personally to learn even more about your 'Museum Bathing' concept.

個人的にも、3名のコメンテーターの一人として参加できたことを大変うれしく思っています。また、柔軟にご対応いただいたおかげで、自分の考えを共有する上で最良の環境を整えていただけたと感じています。主催者の皆さまにもご満足いただけていれば幸いです。

今回のミーティングに対する私の簡単なコメントは、次のとおりです。

第1回スタディ・セッションでは、多くの興味深い実践事例を知ることができましたが、何よりも、イタリア、日本、イギリス、台湾といった異なる国々のあいだで、クリエイティブ・エイジングの活動が生み出すつながりを強く感じました。これらの活動を通して、私たちは高齢者をどのようにケアしていくかを共に学び、結びついているのだと思います。

11月には日本を訪れる予定ですので、ぜひ直接お目にかかり、「博物館浴（Museum Bathing）」のコンセプトについて、さらに詳しく学ぶ機会があればと願っています。

（ジェーンさんの感想）

Friday's study session was wonderful. It was so interesting hearing Teshima san's presentation and his approach. And to hear from Taiwan and Italy about their programmes.

I felt I learned that there were a lot of common threads between our countries and how we are working with older audiences. I felt that working collaboratively and with empathy were two aspects that shone through. I also felt that the importance of treating older people as individuals with their own thoughts, and hopes and ideas was clear from the discussion.

I'm looking forward to the next study session.

金曜日のスタディ・セッションは素晴らしいものでした。

手嶋さんの発表とそのアプローチを伺えたことは大変興味深く、また台湾やイタリアのプログラムについてのお話を聞けたこともとても印象に残っています。

今回のセッションを通して、高齢者を対象とした取り組みにおいて、私たちの国々のあいだには多くの共通点があることを学びました。特に、協働して取り組むこと、そして共感を大切にする姿勢の二点が強く心に残りました。また、高齢者の方々を、それぞれが自分自身の考えや希望、アイデアを持つ一人ひとりの存在として尊重することの重要性も、議論を通して明確に感じられました。

次回のスタディ・セッションを楽しみにしています。

（参加者の感想）

○（手嶋さんへの感想）

大変素晴らしい活動を知り嬉しく思います。

一方、手嶋さんが、ほぼボランティアベースで、このような素晴らしい活動をなさっていることを口にされたことで、改めて我が国の心貧しい現状を憂います。

医療現場も介護現場も等しく人手不足。現場は疲弊しており、更に、それに呼応して、医療施設も介護施設も経営難、経営難ですが、このような、質を問い、患者様や利用者様の尊厳を大切にする活動に必要な対価が支払われる体制が、我が国にもあったらと心から思います。

手嶋さんは、介護福祉士の資格と博物館学芸員の資格をお持ちとのこと。日々、利用者様に接される中で得る視点と、学芸員資格をお持ちならではの視点を活かした工夫の数々に大変感銘を受けました。特に、発表の中で、「絵を鑑賞しながらギフトを考える」というプログラムに、鑑賞のプロの視点を持つ学芸員ならではの発想では、と興味を抱かせて頂きました。そして、コメンテーターの方からのご指摘もあった通り、鑑賞というアクト越しに、認知症治療のみならず、全てのメンタルヘルスケア治療法のトッププライオリティである人との繋がりを間接的に滑り込ませている、素晴らしい内容であると感じました。私の務める高齢者病院でも是非、取り入れたいプログラムです。

（ジェーンさんのコメントへの感想）

今回は、Performing Medicine: Circle of Careの存在を教えて下さったことに感謝を申し上げます。私自身は作業療法士という医療職ですので、この考え、存在には非常に興味があります。この講座に参加する前から、アートに関わることがもしかしたら医療職や介護職の尊厳を高め、癒やされ、そのことが介護、看護の質をあげることに繋がるのでは、と言葉にできずも感じておりましたので、大変嬉しく思います。

（ルカさんのコメントへの感想）

今回は、「イタリアにおけるアートと人の健康との関わり」の豊かさに圧倒されました。

博物館運営者への研修体制、公的ガイドラインの整備、若い世代との交流がベースとなる博物館利用、パンフレットやレストランなどの整備、高齢者を能動的な生産者とするカレンダー企画などを聞いて、自然過ぎて、すべてにため息が出そうです。

今、日本で行われている万博でのイタリア館のメッセージがArt Regenerate Life です。いろんな意味を含めてのArtですが、Artと人の尊厳、健康との関係を、何の迷いもなくバーンと大テーマとできる、イタリアの凄さを感じます。

これから、博物館浴が日本で広がって行くための大切なメッセージを受けたような気がしています。

（黄さんさんのコメントへの感想）

手嶋さんへのコメントの中で、介護者も含めた鑑賞後の評価の大切さを述べられたことに同意します。博物館浴によって、介護職がストレス軽減の恩恵を受けることのみならず、

美術鑑賞というアクトを介しての介護職と患者、利用者との対話こそがお互いの尊厳を生み出す、博物館浴効果なのではという、今回の発表者、コメンテーターから得た知見に繋がっていると思います。評価の対象を“介護者”へ広げることの大切さに言及して頂きありがとうございます。

博物館浴後の生理的効果、特に睡眠改善効果が明らかになったことは大変素晴らしいことかと思います。だからこそ、更に踏み込んで、博物館浴の何が一体良いのかの検証を知りたいと思いました。自分の好きな絵や展示物を鑑賞することなのか、触ることなのか、はたまた、それについて他者と話すことなのか等々。そして、それは他のアクティビティ、例えば、運動、音楽、園芸プログラムと比較してどこがどう特筆すべきところなのか。知りたいことがあふれてきます。

○手嶋さんの発表の中で印象的な言葉は、「施設利用者の尊厳を損なったプログラムの定番化・単純化」だと思います。そのため「俺を子ども扱いするのか」というある種の悲鳴が生まれてきます。これを踏まえ、認知症の方の「顔認識やカタチの判別困難」という点や、感情的な心の動きの過程に着目し、熊手を使ったアクティビティやギフトスタイルの鑑賞方法という方向に昇華していきました。これにより、施設利用者一人ひとりの尊厳を尊重したアクティビティを追及している様子について垣間見ることができました。

博物館に置き換えると、平成29年施行の「改正文化芸術基本法」や令和4年度（2022）年成立の「博物館法の一部を改正する法律」から、文化芸術の福祉への取り込みや社会福祉施設との連携が示され、国として文化芸術と福祉の関連が示されています。しかし学芸員含め博物館職員で、高齢者施設の利用者への適切なアクティビティやそもそもの接し方などで知らないことが多いのではないかと思います。つまり、博物館職員だけで想像するのではなく、手嶋さんのような博物館とのつながりを求めている職員との連携は必須事項だと考えます。

○久しぶりのオンライン講座、とても有意義でした。

手嶋さんの取り組みが本当に素晴らしく、利用者の皆さんにも手嶋さんの温かいお気持ちは十分に伝わっているのだろうと思いました。引き続き手嶋さんの更なる活動をお聞きしたいところです。

子ども扱いするのかという場面は、高齢者分野に限らず、障害者分野にも当てはまると思います。

人間としての尊厳をいつも考えさせられるところです。

海外の登壇者の方々からも、重要な気づきをたくさんいただきました。温かいコメントの数々が、とても印象的でした。色々な立場の人が協働して、人と人とのつながりを大切にしながら、私も様々な活動をしていきたいと改めて感じました。

注）本報告書では障害の社会モデルに基づき「障害」と表記する。障害を個人の問題ではなく、多様な心身を持つ人々を想定せずに形成された社会環境に起因するものと捉え、社会全体が変わるべきだと認識するためである。

○手嶋さんのお話では、高齢者の方一人一人に寄り添った取り組みを伺うことができて、とても勉強になりました。他の国の事例を伺い、多くの人たちで輪になって取り組む必要があると思いました。

○手嶋さんによる、伝統文化やアートをベースにした様々なアクティビティの紹介を、興味深く拝聴しました。高齢者との対話型鑑賞を、定型にとらわれず、工夫された質問を用いて行なっている点になるほどと思いました。

高齢者を、患者としてではなく、その人自身として向き合っていることがうかがえます。施設にお勤めながらボランタリーに活動をされているとのことで、仕組み化されていないところでフットワークが軽いであろうことと、一方で、リソースの課題があるという点について共感するところがありました。

黄さんのエネルギッシュな活動に関心しました。嗅覚や味覚、それが記憶に結びつくことは誰にとっても身近で、個人的にとてもインクルーシブな要素だと思っていますが、それを美術館での高齢者の記憶を刺激する活動にまでつなげて実現しているところに感銘を受けました。スパイスやタンスの消臭剤といった身近なアイテムが紹介され、それは台湾の例でしたが、どの国の人でも似た様な懐かしさにつながる匂いを持っているだろうと思いました。積極的に検証をされているのも大変素晴らしく、これからのミュージアムにとって、重要な裏付けとなっていくだろうと思いました。

ジェーンさんが紹介したが、マンチェスターの「Age-Friendly」というあらゆる世代を包摂する考え方や、若者のためでもあり、高齢者の意見も取り入れるという立場が素晴らしいと思いました。また、若い頃にアートをしていた人へ、高齢になって再びアーティストとして活動することを支援するスコットランドの取り組みは、様々な事情でアートを辞めてしまった人にはとても心強く（私自身も美大出身で、様々な事情で続けられていませんが、いつか絵を描くことに戻りたいといつも思っています）、また、生きがいや年齢を重ねていくことの楽しみにつながるのではないでしょうか。

ルカさんが紹介したトスカーナのアルツハイマー患者に向けたミュージアムのネットワークとして、まず70という数に驚きました。

高齢化が日本と大変似た状況であり、美術館も、危機意識を持っていることがうかがえます。また、認知症のためのミュージアム基準の制定について、もっと詳細を知りたいと思いました。

美術館のプログラムへ参加した高齢者が、一館一月ずつのカレンダーを作成する活動は、過度に高度でなく、かつ未来を考えるクリエイティブな協働作業となっているのではないでしょうか。アイデアが素晴らしいと思います。

○昨年度の手嶋さんの発表で「認知症になっても生涯学習が継続できる社会へ」という言葉に心を揺さぶられましたが、今回は認知症の人への対応に「尊厳」「個の尊重」「個の考慮」が感じられ、コメンテーターの3人がそれを見事にことばに表してくださったことが大変勉強になり、手嶋さんを応援していますという気持ちにも受け取れました。

黄さんの「社会的責任」という覚悟や、精神的生理的な効果が出ていることが知れてよかったです。

3人の方に共通していたのは、さまざまな分野、異年齢、多様性のある連携で協力する、考え行動するという実践発表だったと思います。つながりあうことの大切さを再確認しました。

○発表者となった介護福祉士の手嶋さんは、学芸員の知識を活用して、介護施設で行う認知症患者様へのプログラムがとても興味深かったです。特に、エミールガレのガラスを題材に、誰に送りたいか（ギフト）を考えるというアプローチは、個人が大切な人を思い出すきっかけにもなると思いました。また、親になった経験のある方は、自分は高級なものはいらないが、子どもに与えることに幸福感を感じるかたも多いと思います。もちろん、自分へのご褒美として（ギフト）という考え方もあり、素敵だと思いました。

私は学生時代に、ホームヘルパーの資格取得のため、デイサービス、認知症の方の自宅介護の実習を経験しました。介護サービスの現状を知り、その当時からは比べものにならないほど、発展を遂げていることを知ることができました。

コメンテーターの方々の事例も本当に興味深かったです。

特に印象的だったことは、個人に寄り添った取り組みを、世界の各国で実践しているということです。

高齢化の問題は、今後も深刻になっていきますが、世界中でこのような取り組みが行われれば、年齢を重ねることが楽しみになるのではないかと感じます。

○手嶋さんの愛情あふれるプログラムの内容に感銘を受けました。

・認知機能は低下しても、別の機能は成熟すること
・他者との関係性を意図したギフトのプログラム
・介護者の安らぎの必要性など、現場からのリアルな見解を伺えました。

黄さんの「匂い」に関連したプログラムにも興味を持ちました。匂いよる記憶の想起には様々な可能性があると思います。

ジェーンさんのルミネートのサポートプログラムに興味を持ちました。

ルカさんのイタリアの状況の報告はなかなか聞く機会がなかったので新鮮でした。トスカーナに70以上ミュージアムがあること自体すごいと思いましたが、共同プログラムが行われていることにも驚きました。

○手嶋さんの講演の根本には、個人の尊厳に対する敬意があり、その姿勢に深く感動しました。多様性や包摂性を重視したアクティビティは、誰一人として取り残さない優しい社会のための活動だと感じました。支援の場やアプローチは違いますが、私も「心がととのう社会」を目指して活動し、手嶋さんの活動も応援し続けたいと思います。

また海外の事例を学び、生の声を聞くことで視野が広がりました。特に「感情の支援の場」や「ケアジャーニー」などのフレーズが印象深かったです。

○今回一番印象に残っているのは「子ども扱いするな」という参加者の声です。

美術館でワークショップをしていると、子ども寄りの内容になりやすいですし、そのような内容でも、美術館に（主体的に）来館している参加者は楽しく受け止めてくれますが、介護の現場において、参加者の意思にかかわらずグループ参加するようなプログラムでは、そのプログラムに興味がない人もいることをしっかりと踏まえて、いかに全員がポジティブに参加できるかを考えなければならないなと感じました。

学校連携などでは、生徒の意思に関係なく授業の一環として生徒全員がプログラムに参加するため、参加者の関心レベルによってプログラムがどのように見えるかを、しっかり考えていきたいと思います。

第２回

院内学級に対するオンラインプログラムの開発　～これまでとこれから～

■ 講 師

三角 徳子（福岡市博物館/集客・広報普及専門員（教育普及担当））

■ 講師から一言

院内学級などの事情により、対面での出前学習が困難な特別支援学校児童を対象に、令和2年度から始めたオンラインプログラムの成果と課題を報告するとともに、今後期待されるオンラインと対面を併存したハイブリットプログラムを展望します。

■ 開催日時

2025年10月17日（金）17:00～18:30（16:45～受付開始）

■ 受講者数

37名

■ 当日の記録映像

右のQRコードからご覧ください。

■ 事後アンケート

今日の学び、気づきを記録して、視覚化しておきましょう。

（黄さんの感想）

Thank you very much for organizing today's study session.
I was very glad to hear the inspiring case studies and reflections from different countries.
The presentation from Japan was particularly impressive — sharing how, during the pandemic, museum educators collaborated with teachers and experts from other fields, continuously reflecting and improving their practices to find meaningful ways to reach children in hospitals. It reminded us that museums never give up on their mission to contribute to society.
Similarly, the presenters from the UK and Italy showed how museums can use technology to help people learn and stay connected through museum experiences. Seeing such dedication from different countries reaffirmed my belief that museums play a vital role in supporting and bringing hope to society.
I am truly grateful for this opportunity to exchange ideas online.
Despite being in different countries, we can strengthen our shared conviction in the social value of museums.
Thank you again for your kind guidance and for creating this valuable platform for discussion.

本日のスタディ・セッションを企画・運営してくださり、誠にありがとうございました。

各国からの刺激的な事例紹介や考察を伺うことができ、大変うれしく思いました。

とりわけ日本からの発表は非常に印象的でした。パンデミックの最中に、ミュージアム・エデュケーターが教員や他分野の専門家と連携し、継続的に振り返りと改善を重ねながら、入院中の子どもたちにどのように意味のある形で関わることができるかを模索してきた取り組みが共有されました。そこから、博物館が社会に貢献するという使命を決して諦めない存在であることを改めて感じました。

同様に、イギリスやイタリアからの発表では、博物館がテクノロジーを活用し、人々の学びやつながりがミュージアム体験を通して支えている様子が示されました。各国に共通するこのような献身的な姿勢を目にし、博物館が社会を支え、希望をもたらすうえで重要な役割を果たしているという私の信念が、改めて強まりました。

このようなオンラインでの意見交換の機会をいただけたことに、心より感謝しています。

国は異なっていても、博物館の社会的価値に対する共通の信念を、今後さらに強めていけると感じています。改めまして、温かいご指導と、この貴重な議論の場を設けてくださったことに深く御礼申し上げます。

（ジェーンさんの感想）

Many thanks for a fascinating session today.
It was a very valuable time with lots of opportunities to share experiences across countries.
From today I was struck by the important role museums play in children and young people's lives and how we can be a special space that sits between home and school.
Particularly for children who are experiences challenges with their health or disruption in their lives.
I really enjoyed hearing Misumi san's brave approach and the reflections from colleagues in Taiwan and Italy.

本日は大変興味深いセッションをありがとうございました。各国の経験を共有する機会が多く、とても有意義な時間でした。

本日、特に心に残ったのは、博物館が子どもや若者の人生において果たす重要な役割です。博物館は、家庭と学校のあいだに位置する特別な空間になり得ると感じました。

とりわけ、健康上の課題を抱えていたり、生活の中で困難や混乱を経験している子どもたちにとって、その意義は大きいと思います。

また、三角さんの勇気ある取り組みや、台湾やイタリアの同僚の皆さんの振り返りを伺えたことを大変嬉しく思いました。

（ルカさんの感想）

Thank you for hosting me again during the second 'Study session': it was a very inspiring morning for me, and I hope that my intervention was useful for the audience.
My brief comment would be: "During the second 'Study Session', thanks to Misumi-san's presentation and the case studies from the United Kingdom and Taiwan selected by Jane-san and Huang-san, I was able to broaden my views on remote museum programs. It was inspiring to witness how museums are providing outreach activities for hospitalized children, and it made me think about elderly people who are permanently in care homes.
Such programs should be shared with them as well, and this could be a starting point for conducting future research on the matter".

第2回「スタディ・セッション」に再びお招きいただき、ありがとうございました。私にとって大変刺激的な午前中となり、私の発表が参加者の皆さまにとって少しでも有益なものであったなら幸いです。私からの簡単なコメントは以下のとおりです。

第2回『スタディ・セッション』では、三角さんのご発表、そしてジェーンさんと黄さんが選定されたイギリスおよび台湾の事例紹介を通して、遠隔型ミュージアム・プログラムに対する理解と視野を広げることができました。

入院中の子どもたちに向けて博物館がアウトリーチ活動を行っている様子は非常に感銘深く、同時に、介護施設で生活している高齢者の方々のことも考えさせられました。

このようなプログラムは高齢者の方々とも共有されるべきであり、今後この分野に関する研究を進めていくための出発点になり得るのではないかと感じました。

（参加者の感想）

〇三角さんが培われてきた、特に院内学級の事例をお聞きできて、まさに人と人との信頼関係が博物館活動の展開を見せていると思いました。私も見習い頑張りたいと思います。

〇小学校と連携をしていた中での気づきから、院内学級のオンラインアウトリーチを始めた三角さんには、博物館職員としての責任感を感じ、紆余曲折しながら継続していることに勇気をいただきました。ジェーンさん、黄さん、ルカさんのコメントで印象に残った言葉は、「企画をする上で、子どもの本当のニーズを理解しようとする配慮」でした。オンライン配信以上の質、対面に近い参加感覚がありました。必要不可欠な博物館、心理的サポートをするぬくもりを感じる博物館、とたくさんありますが、一番は「希望」という言葉でした。まだ小さい子どもが、もしかしたら生まれて間もないうちから闘病生活をしている子どもが、怖い思い、痛い、苦しいという状態を、一時でも忘れられるような体験学習をプレゼントできて、それが希望につながるように活動されているのだと思いました。

〇三角さんはじめコメンテーターの皆様の事例は、博物館に行けない子どもたちにも心のよりどころとしての博物館を届けることはできるのだと再確認するお話でした。

また、講座の参加者が不在となった際に博物館サイドの憶測で改善を図るのではなく、直接ニーズを把握する三角さんの姿勢に深く感銘を受けました。私自身の介護施設での活動においても、高齢者に対する効果やエゴの押し付けにならないよう注意を払って取り組んでいきたいと思います。

職場内外の繋がりを広げ、深めていけるよう、私自身のモチベーションも上がる機会となりました。今回も貴重なお話をありがとうございました。

〇今回の院内学級へのアプローチや内容について、大変興味深く拝聴させていただきました。

所属機関で実施しているアウトリーチプログラムでも、院内学級や病院のイベント向けに文化財の高精細複製品を使用した教育プログラムを実施しているのですが、国・地域や病院によって大きな差があることもひとつ大きな視点となりました。病院はなかなかに実施が難しい機関であることは身をもって実感しておりますので、三角様はじめ、各国の皆様の努力は本当に尊いものだと改めて感じております。

○勤務館でも、院内学級はじめ、外に出かけられない方々を対象としたプログラムについて、数年前から検討していますが、コレクションが現代美術であることなどから、どうしても外部の方からの関心が薄く、なかなか一歩踏み出せない状況でした。

今回、三角さんの事例を聞き、対象者を慮った非常に丁寧な取り組み、さらにイギリス、イタリア、台湾の美術館、博物館の取り組みを拝聴し、少しずつでも良いので何か始められればと思った次第です。

○今回の黄さんのご発表にあった「博物館は知識を提供するだけではなく、温もりを提供することができる」など、第三の学習の場としての博物館の役割については、日ごろ美術館で教育普及に携わっている中で実感しているところでした。

○コメンテーターの黄さんの言葉で、「博物館は第三の学習スペースである」は印象的でした。

また、黄さんは「博物館における学びは、学校教育のようなカリキュラムに縛られるのではなく、自分の興味に即して自由に行われるもので、博物館は体験する自由さを提供する必要がある。博物館に来られない院内学級の生徒に対し、病院内でもできることを実施し、学びの火を絶やさないような工夫が必要」と話していました。

私はこれを、博物館は学習の場であると同時に、自分でテーマを決め、自分のペースで行い、かつそれを楽しむことができる場所であるというように理解しました。

さらに、黄さんの話の中で、「思いやり・創造性・共感という3点が博物館プログラムを支える柱」であるという言葉もあり、来館者に寄り添うことの重要性を感じました。

○大変興味深い発表でした。オンラインであるということ、対象が子どもさんであることから、色々な制約があり、配慮が必要であるというのは容易に想像がつきましたが、粘り強く丁寧に活動を継続されているご報告に、心を打たれました。

例えば、子どもさん達の初対面での不安を軽減するために、スタッフの自己紹介を長めにし、まずはラポールを取る事を重視する、というようなことは、シンプルではありながら、とても大切なことだと感じました。

長期入院を余儀なくされる子どもさんは、今回の事例のような少し特別な知的好奇心をくすぐられる活動経験がなかなか得られにくいことと思います。一方、このような体験こそが、子ども達の心身の育みに繋がるものだとすれば、“博物館が病院にやってくる”体験はまさに画期的な試みかと感じました。さらにこの体験は、院内学級の子どもさんのみならず、子どもさんをお持ちの親御様、そしてその子どもさん、そしてご家族を支援する立場の医療、介護スタッフにとっても“明るい話題を自然に共有する”という観点から、得難い機会なのではと思います。

アナウンスから実施までの期間への考察、ハイブリッドでの工夫、等々、本当に一つ一つ丁寧に改善を続けておられる姿勢にも、とても感銘を受けました。

○今回の三角さんの講演を聞いて、博物館の存在意義について学べました。

博物館が第三の学びの場として、学びの火を絶やさないようにしていること。情緒的・社会的支援も提供し、つながりを生み出していること。

そんな博物館の包摂的な姿勢に、また思いやり溢れる温かな場であることに感銘を受けました。

私が勤務している自立援助ホームでは、家庭に居場所がなく義務教育も受けられなかった子もいます。現代においても読み書き計算ができない境遇にいる子どもがいます。そんな子にも学びの機会と、安心安全でつながりを感じられる温かな場として、博物館のような場が必要だと感じました。

また、ホームでは子どもと遊ぶ機会もありますが、遊び（体験的活動）も老若男女を問わない包摂的なアートなのだと思いました。現場では生活支援や就労支援が優先されますが、遊びという情緒的な支援を通して子どもの心を癒すことの大切さも再認識できました。

遊びやアートは人の心に余裕を生み出し、人の心を救う活動なのだと思いました。

今回も素晴らしい語り場をありがとうございました。

第3回

不登校児童生徒を支える博物館活動

■ **講 師**

池田 優（北九州市立自然史歴史博物館/教育普及担当係長（ミュージアムティーチャー））

中西 希（北九州市立自然史歴史博物館/学芸員）

■ **講師から一言**

オンラインによる授業で博物館が果たす役割や、事業に関わる担当者の熱い想いをお伝えします。また、子どもたちの感想をもとに、学習への興味・関心の高まりや、外界への意識の変化についてもお話しします。

■ **開催日時**

2025年11月14日（金）17:00～18:30（16:45～受付開始）

■ **受講者数**

36名

■ **当日の記録映像**

右のQRコードからご覧ください。

■ **事後アンケート**

今日の学び、気づきを記録して、視覚化しておきましょう。

（ジェーンさんの感想）

It was really interesting to reflect on how museums can support young people across so many aspects of their lives. All the different speakers and commentators words reminded me of the thought and consideration we are all making to connect more people to museums. It feels like there is a great effort and commitment across all countries to always continue learn and improve. I feel working from all different approaches and angles together we can make sure museums are a welcome place for all.

博物館が若者の人生のさまざまな面をどのように支援できるのかを振り返ることは、とても興味深いものでした。さまざまな登壇者やコメンテーターの言葉から、より多くの人々を博物館につなげるために私たち全員が深い思慮と配慮を払っていることを改めて感じました。

どの国でも、常に学び続け、改善していこうという強い努力と献身があるように思います。異なるアプローチや視点を持つ私たちが一緒に取り組むことで、博物館がすべての人にとって歓迎される場所になるようにできると感じています。

（ルカさんの感想）

These study sessions were an unique experience for me, and I will never thank you enough for having chosen me as one of the three commentators. My impression from the last session would be: "Thanks to the presentation led by Ikeda san and Nakanishi san, I was able to truly witness the museum's potential to become a third place, different from home and school. There, the students can become fascinated by the wonders of knowledge and find an extra motivation to get into the outside world.

今回の勉強会は私にとって特別な経験であり、3人のコメンテーターの一人に選んでいただいたことには、いくら感謝してもしきれません。

池田さんと中西さんが主導されたプレゼンテーションのおかげで、博物館が“家庭や学校とは異なるサードプレイス”となる可能性を本当に実感することができました。

そこでは、生徒たちが知の世界の魅力に引き込まれ、外の世界へ踏み出すための新たな原動力を見つけることができます。

（黄さんの感想）

This discussion on how museums can support children who are unable to attend school is profoundly meaningful. It reminds us that the role of museums is diverse and continuously evolving in response to a changing society.

学校に通うことができない子どもたちを、博物館がどのように支援できるかという今回の議論は、非常に意義深いものでした。

これは、社会の変化に応じて博物館の役割が多様化し、常に進化し続けていることをあらためて思い起こさせてくれます。

（参加者の感想）

○不登校児童生徒へのプログラムを通して、博物館へのリピートや学び続ける姿勢に繋がったという皆さんのコメントから、本人が「また行きたい」「またしたい」と思える自主的なマインドを育てることの重要性に、私自身も深く共感しました。

さらに、学芸員だけでなく教育委員会との連携の中で活動が進んでいる点は、リンクワークとして社会に開かれる大きな接点になると感じました。

台湾のデジタルミュージアムの事例も印象的で、疑似体験が“補助的なもの”を超え、新たな学びの入口になり得る可能性を強く感じました。一方で、デジタルという疑似体験だけでなく、直接触れ合う機会へつなげることの重要性も語られており、そのバランスの視点にも大きな学びがありました。

私自身の活動は、現状として博物館に行くことが難しい方へのアプローチがメインです。しかし、活動への認識が広がる中で、移動可能な方にとっては博物館に向かうきっかけにもなればと考えています。私自身の活動をより良く育てられるよう、これからも尽力していきたいと思います。

○今回の感想を一言で述べさせていただくなら、不登校の児童・生徒に博物館は何ができるか、ということに対し、「学校教育に戻そう」ということではなく、「第三の居場所に」という方向性で良いのだ、ということに触れてくださり、再確認できた、自信がついた、そんな気持ちになりました。

9月から始まった3回の講座を通じての感想として、日本の事例発表者の皆さんが様々なケースに対して、工夫して取り組まれていることから、自分も前向きになれたこと、そして海外の皆さんのコメントが本当に素晴らしくて、コメント力として互いに向上していけるパワーを与えるスキルだとも思いました。

それこそ、聴講するだけでしたが、ホッとする時間を共有していただき、ありがとうございました。

○事例紹介の中でご紹介いただいた「博物館は第二の学校（セカンドスクール）事業」にとても感銘を受けました。

事業は、オンラインの特性を活かし、安全な場として、不登校の児童生徒の居場所となっていることがご発表からよく分かりました。

いのちのたび博物館の展示の工夫が素晴らしく、プログラムに参加した生徒たちの感想によって、

・「早起きした」生活習慣の改善

・「博物館に行きたい」外界への一歩

→これらが、不登校解消につながる可能性を大いに含んでいることも明らかでした。

そして、コメンテーターの皆様の「不登校児童生徒のプログラム」の共有では、

・台湾の黄さんから、国立歴史博物館での経験を活かしたプログラムの開発のお話を聞きました。

台湾の博物館教育は、社会教育であり、学校教育ではないため、すべての人がターゲットということも知ることができました。

そのため、日常生活に直結していること、暗記ではなく考察を促すような場でなければならないことから、人々の関心を促すために、物語性のあるテーマを選択している工夫も、参考になりました。

コロナ禍を機に、デジタルツールの開発が進んでいることも知り、デジタルツールの効果的な活用方法について考えてみたいと思いました。

・イタリアのルカさんからは、異なる年齢にグループを分け、適したプログラムが受けられる仕組みのお話を聞きました。

マインドギャッププロジェクト「学校でも家庭でもない場所でサポートする」という活動が心に残りました。セラピーモデルとして、感覚を体験し、外界への関心を高め、再びコミュニティに戻るきっかけづくりの良い方法だと思いました。

・イギリスジェーンさんからは、特別支援、恵まれない環境の児童生徒が不登校になることも多いことから、地域として課題に取り組む重要性をご紹介いただきました。

若者主導のプログラムによって、メンタルヘルスを回復すること、博物館や地域施設でプロジェクトを実施していること、そして、版画制作を行った事例では、事前にアートボックスを送付して作品制作、それぞれの作品を鑑賞する取り組みをご紹介いただきました。

小学校6年生が中学生に上がるタイミングで、感情やウェルビーイングへの支援を行うことは、当事者の不安の解消にとても役立つと思いました。そして、教師向けのプログラムの実施も、教育現場と博物館との連携のきっかけになるのではないかと思いました。

全3回の講座では、様々な施設、国での活動を学ぶことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

○いのちのたび博物館の池田さん・中西さんの発表について、すごく興味深かった点として、子どもたちの自己表現を助けるための配慮がすごく行き届いていると感じました。

骨格標本から「何の動物の骨か？」という問いを出し、そこからチャットで回答したり、その後に質問したりという方式が、インスタグラムやYouTubeを使ったライブ配信のようで、現代の子どもたちにとって馴染み深いコミュニケーションツールのようにも感じられました。

またこれに付随して、授業を受けるために、学生の朝早起きする生活習慣が身についたという点には驚かされました。このコミュニケーションツールについては、コメンテーターの方々も評価しているように見えました。

またコメンテーターの方々の発表を受けて、中西さんが今の活動の中で「学校に戻そうとするという意識」について言及されており、子どもたちが望むなら学校に戻さず、自分の興味分野の探求につなげるという点について触れられている点が印象的でした。

これまでの3回の講座を受け、自分の職場で実践の可能性を模索し始めました。現時点では、学校が見学に来るという一方向の利用にとどまっており、再来年度からはアウトリーチ活動を企画することを考えています。

その点で、子どもたちとの接し方や配慮の方法についてとても勉強になりました。

○今回の講演は、高校時代に4年間の引きこもりを経験している私にとって共感できる点（生活リズムや自己表現の苦手さ）が多く、そこに対する様々な配慮や支援を知り心が温まりました。

私は健康の3大要素は睡眠・食事・運動だと考えていましたが、それ以外にも、「つながり」や「芸術（クリエイティブ）」なども健康に大きく寄与していることを学べました。

また、音楽療法や運動療法といった概念を知ることで、引きこもり当時の私自身も、音楽や運動などに救われて立ち直れていたことに改めて気づけました。

他にも、文化的福祉、クリエイティブヘルス、感情調整力など、新しく興味深い概念を知ることができました。

私事ですが、来年から精神保健福祉士の専門学校に通います。

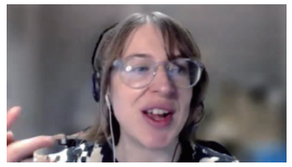
博物館が第三の場としてケアに繋がることを学べたからこそ、博物館も活用していける専門家でありたいと思います。

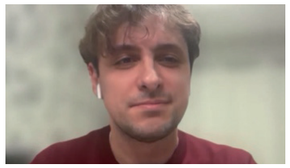
第1回（手嶋さん）

第2回（三角さん）

第3回（池田さん,中西さん）

コメンテーター
台湾：黄さん


コメンテーター
イギリス：ジェーンさん


コメンテーター
イタリア：ルカさん

7 博物館のリラックス効果に関する「博物館浴」実証実験ツアー

【開催趣旨】

ロンドン大学（英国）のDaisy Fancourtら（2019年）は、「芸術を鑑賞する機会の多い人は、鑑賞する機会を全く持たない人に比べ、死亡率が有意に低い」という報告をしました。

こうした研究を踏まえ、英国のNHS＝国民保健サービスはロンドン大学などと共同し、文化芸術を活用したメンタルヘルスプログラムを地域住民へ提供しています。また、カナダ、ベルギー、スイス、台湾などの医療保険制度では、医療従事者（主に医師）が地域のリンクワーカーを介して、患者へ適した博物館が行う教育プログラムへの参加を薬と同じように「処方」し始めました。

ところで、日本では超高齢社会に突入し、多死社会が現実化してきています。団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題です。

そして、児童生徒の不登校が約35万人（令和5年度文部科学省調査）、若者のひきこもりが約65万人（内閣府：令和5年3月発表）に上っています。さらに深刻なことは、労働者の82.5％が「強い不安、悩み、ストレスを感じる」というデータ（令和4年度厚生労働省調査）もあります。

こうした社会課題に、文化芸術、そして博物館・美術館はどう立ち向かえるのでしょうか？

私たちは、地域の医療・福祉機関と連携した、地域住民のための「博物館浴（博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動）」の研究を進めています。

博物館に行くと、「広くて落ち着く」「絵を見ると、うっとりする」などの声を聞くことがあります。しかし、これは個人の感想で、科学的な根拠はありません。

そこで、博物館の作品を鑑賞する前後に、生理測定（血圧、脈拍）、心理測定（POMS＝感情評価）を行い、リラックス効果を判定する実証実験を、2020年9月から始めました。

これまでに全国100を越える博物館の協力を得て、1,800名のデータを集めています（2026年2月現在）。

今回は、全国8ヶ所の博物館、資料館、美術館等の協力を得て、地域の皆様を対象として、1回で大量データ収集可能な自律神経測定機器による「博物館浴®」実証実験を行うことで、「健康・ウェルビーイング」の場という、博物館の新たな価値創造を考える機会になることを目指します。

【実験方法】

実験①（作品鑑賞前の生理的・心理的状態を測定する）
演習①（展示室で作品鑑賞をする。鑑賞方法は黙々鑑賞、おしゃべり鑑賞がある）
実験②（作品鑑賞後の生理的・心理的状態を測定する）
演習②（博物館浴研究の最前線を説明する）

【測定方法】

生理測定：自律神経の状態や脳の疲労度を測定する「マインドスケール」
心理測定：感情評価を測定する心理用紙「POMS」

【留意点】

実験参加者の個人データは、研究目的以外の使用や第三者に提供することはありません。また全ての自律神経測定機器による計測は、非侵襲により、身体を傷つけることなく行う実験手法であり、痛みなどはありませんのでご安心ください。

【人権の保護及び法令等の遵守への対応】

本プログラムでは、参加者の自立神経の状態に関するデータを収集するため、九州産業大学「ヒトを対象とした研究に関する倫理委員会」の承認を得た上で実施します。
具体的には、参加者に対してプログラムの内容について、口頭で説明し、同意をいただいた後に実施します。
なお、収集したデータについては、個人情報が特定されないよう匿名化した上で、専用の記録媒体に保存し、研究代表者・共同研究者・研究協力者以外が見ることができないようにします。

1 第1回「博物館浴」実証実験ツアー

- **開催日時** 2025年8月5日（火）10：25～11：30（10：00～受付開始）
- **実施方法** 心理測定（POMS）、生理測定（マインドスケール）、講義
- **開催場所** おぶせミュージアム・中島千波館（長野県上高井郡小布施町小布施595）
- **参 加 者** 15名（教員）

2 第2回「博物館浴」実証実験ツアー

- **開催日時** 2025年8月16日（土）10：30～12：30（10：00～受付開始）
- **実施方法** 心理測定（POMS）、生理測定（マインドスケール）、講義
- **開催場所** 高鍋町美術館（宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋6916-1）
- **参 加 者** 20名（高齢者）

3 第3回「博物館浴」実証実験ツアー

- **開催日時** 2025年8月26日（火）9：50～15：30（9：30～受付開始）
- **実施方法** 心理測定（POMS）、生理測定（マインドスケール）、講義
- **開催場所** おぶせミュージアム・中島千波館（長野県上高井郡小布施町小布施595）
- **参 加 者** 61名（午前：大学生32名、午後：保健福祉委員他29名）

4 第４回「博物館浴」実証実験ツアー

■ **開催日時** 2025年10月20日（月）
11：15～16：30（11：00～受付開始）

■ **開催場所** 国立西洋美術館
（東京都台東区上野公園7-7）

■ **実施方法** 生理測定
（マインドスケール他）

■ **参 加 者** 68名
（午前：会社員・高齢者27名、
午後：会社員・大学生他41名）

5 第５回「博物館浴」実証実験ツアー

■ **開催日時** 2025年11月26日（水）
10：00～15：30（9：30～受付開始）

■ **開催場所** 美濃加茂市民ミュージアム
（岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1）

■ **実施方法** 心理測定（POMS）、
生理測定（マインドスケール）、講義

■ **参 加 者** 38名
（午前：健康教室参加者他24名、
午後：ボランティア・市職員14名）

6 第６回「博物館浴」実証実験ツアー

■ **開催日時** 2025年11月27日（木）
9：30～13：00（9：00～受付開始）

■ **開催場所** 名古屋大学博物館
（愛知県名古屋市千種区不老町）

■ **実施方法** 生理測定
（マインドスケール）

■ **参 加 者** 14名
（大学生・大学職員・地域住民）

7 第７回「博物館浴」実証実験ツアー

■ **開催日時** 2025年11月30日（日）
9：25～17：00（9：15～受付開始）

■ **開催場所** 北名古屋市歴史民俗資料館
（愛知県北名古屋市熊之庄御榊53）

■ **実施方法** 心理測定（POMS）、
生理測定（マインドスケール）、講義

■ **参 加 者** 57名
（午前：高齢者36名、午後：高齢者21名）

8 第８回「博物館浴」実証実験ツアー

■ **開催日時** 2025年12月1日（月）
9：25～15：00（9：15～受付開始）

■ **開催場所** 北名古屋市歴史民俗資料館
（愛知県北名古屋市熊之庄御榊53）

■ **実施方法** 心理測定（POMS）、
生理測定（マインドスケール）、講義

■ **参 加 者** 32名
（午前：市職員18名、午後：市職員14名）

9 第9回「博物館浴」実証実験ツアー

■ **開催日時** 2026年1月10日（土）
10：00～12：00（9：30～受付開始）

■ **開催場所** 下関市立考古博物館
（山口県下関市大字綾羅木字岡454）

■ **実施方法** 心理測定（POMS）、
生理測定（マインドスケール）、講義

■ **参 加 者** 33名（中学生）

10 第10回「博物館浴」実証実験ツアー

■ **開催日時** 2026年2月3日（火）
10：00～12：30（9：30～受付開始）

■ **開催場所** 北谷町立博物館
（沖縄県中頭郡北谷町伊平1-11-1）

■ **実施方法** 心理測定（POMS）、
生理測定（マインドスケール）、講義

■ **参 加 者** 21名（高齢者）

「博物館浴」実証実験ツアー 生理測定レポート

使用機材：
マインドスケール（株式会社Yume Cloud Japan ）

■ MindScale 測定フロー

1. **短い朗読（約30秒）**
   スマートフォンで簡単な文章を読み上げます。
2. **音声信号の解析**
   声の強さや揺らぎなど、微細な変化を解析します。
3. **AIによる推定**
   脳の覚醒度と自律神経のバランスをAIが推定します。
4. **現在の生体コンディションを可視化**
   今のこころとからだの状態を分かりやすく説明します。

性別と年齢入力　測定開始　簡単な読上げ　3つの自覚質問　点数にて表示　結果の説明

❶ 実施概要

- 博物館数：10施設　　●参加人数：322名
- 改善率：85%（変化なしを含む）　●改善率：49%（変化なしを含まず）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
8/5/2025	8/16/2025	8/26/2025	10/20/2025	11/26/2025	11/27/2025	11/30/2025	12/01/2025	1/10/2026	2/3/2026	合計
小布施	高鍋	小布施	西洋美術館	美濃加茂	名古屋大	北名古屋	北名古屋	下関	沖縄	
14	20	60	36	37	14	55	32	33	21	322

	（人）	（%）
大幅改善	34	11
少し改善	123	38
変化なし	117	36
少し減少	26	8
大幅減少	22	7
合計	322	100

85%

❷ 年代別特徴

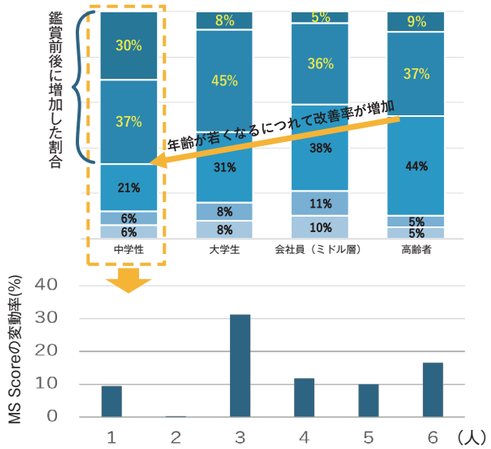
- 中学生：全年代の中で最も改善効果が見られた
  【検証内容】年代毎（中学生、大学生、会社員（ミドル層）、高齢者）の比較を実施
- 大学生：中学生に次いで改善効果が見られた
  【検証内容】年代毎（中学生、大学生、会社員（ミドル層）、高齢者）の比較を実施
- 会社員：MS値が低い参加者（ストレスが高い人）にとって高い改善効果が見られた
  【検証内容】 MS値が低い層と高い層での比較を実施
- 高齢者：他の年代と比べて変化が少ない傾向にあるが、一部の人は高い改善効果が見られた
  【検証内容】年代毎（中学生、大学生、会社員（ミドル層）、高齢者）の比較を実施

❸ 年代別比較（MS Score ー 中学生、大学生）

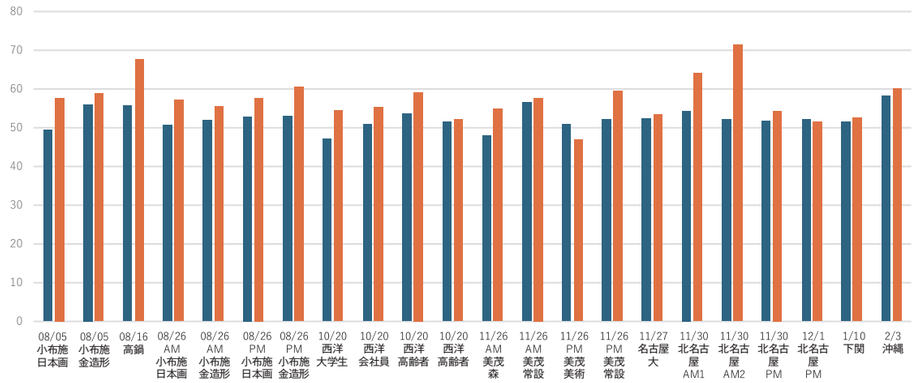
◆結果◆

- 年齢が若くなるにつれて
  改善効果が見られた人の割合が増加。
- 中学生、大学生が上昇しやすくなる傾向だった。
  特に中学生が上昇する割合が著しく高かった。

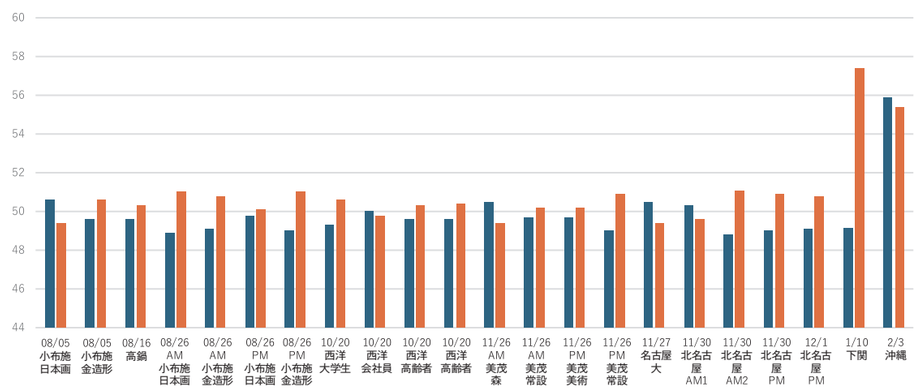
	中学生	大学生	会社員（ミドル層）	高齢者
大幅改善（20%以上改善）	30%	8%	5%	9%
少し改善（5%以上20%未満増加）	37%	45%	36%	37%
変化なし（-5%以上5%以下の変動）	21%	31%	38%	44%
少し低下（5%以上10%未満減少）	6%	8%	11%	5%
大幅低下（10%以上の減少）	6%	8%	10%	5%
合 計	100%	100%	100%	100%



❹ 博物館別比較（自律神経） 全体の傾向： 22の実施条件中19件で鑑賞・散策後スコアが改善



❺ 博物館別比較（脳元気度） 全体の傾向： 22の実施条件中15件で鑑賞・散策後スコアが改善



「博物館浴」説明リーフレット（表、A3版）

これまでの「博物館浴」実証実験で分かってきたことは？

博物館に行くと、「広くて落ち着く」「絵を見ると、うっとりする」などの声を聞くことがあります。しかし、これは個人の感想で、科学的な根拠はありませんでした。
そこで、博物館の作品や資料を鑑賞する前後に、生理測定(血圧、脈拍)、心理測定(POMSなど質問紙)を行い、リラックス効果を判定する実証実験を2020年9月から始めました。
現在までに全国の博物館延べ90館の協力を得て、1,300人以上の科学的データを収集してきました。以下のように自律神経の改善に効果があることが明らかになりました。

① 見学時間が10分、20分、30分でもリラックス効果に影響があった。
② 美術系、歴史系、民俗系、考古系、自然史系など、いろいろな博物館でもリラックス効果に影響があった。
③ 高血圧の人は下がり、低血圧の人は上がるというように、恒常性に戻ろうとすることに影響があった。
④ 「博物館によく行く人」でも、「博物館にあまりいかない人」でも、リラックス効果に影響があった。

これまでの参加者の声

心と体の変化が数値で分かり、面白い。おしゃべりして鑑賞すると、明るい気分になれた。 /高校生

博物館浴と聞いて、最初は信じられなかったが、鑑賞後の数字が下がり、びっくりした。 /大学生

博物館浴は、これまでの敷居が高いと感じていた博物館のイメージを低くしてくれる。 /会社員

博物館浴と聞いて面白いと思った。静けさがリラックスにつながることがよく分かる。 /高齢者

「博物館浴」のこれから

健康は、「運動、食事、つながり」の3本柱で成り立ちます。博物館は作品や資料、時間、そして人が「つながる」場です。「博物館浴」を取り入れると、レジリエンス効果が高まり、ストレスが軽減し、仕事のパフォーマンス向上が期待できます。
今後も科学的データを収集することで、ヘルスケア産業分野の新たな事業やプログラムの開発、例えば、「今日のあなたの自律神経の状態に合わせた最適な作品や資料の紹介アプリ＝『博物館浴健康アプリ』」の開発を進められないだろうかと考えています。そして、処方箋に「博物館」と書くという日が来ることを期待したいです。
さあ、皆さん、「ちょこっと博物館浴」を始めてみましょう。そして、お気に入りの展覧会を見つけて、ココロとカラダの癒しを感じてみませんか。

【研究内容の問い合わせ】 Email: museum03@ip.kyusan-u.ac.jp 担当：九州産業大学地域共創学部特任教授 緒方 泉
【報道、ロゴ使用関係の問い合わせ】 Email: kohoka@ml.kyusan-u.ac.jp 担当：九州産業大学総合企画部広報課

九州産業大学美術館 Museum of Kyushu Sangyo University　KIU 九州産業大学　文化庁 Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

「博物館浴®」説明映像　日本語版　英語版

令和7年度文化庁「Innovate MUSEUM事業」

知って納得！ 博物館浴®
MUSEUM BATHING

「博物館浴®」の定義

博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進、疾病予防に活用する活動です。

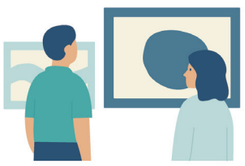
「健康社会」実現を目指した、国際的「博物館浴®」ネットワークによる社会課題解決事業実行委員会（中核館/九州産業大学美術館）

「博物館浴」説明リーフレット（裏、A3版）

私たちは超高齢社会、ストレス社会に生きています

高齢化率は上昇し、日本は世界第2位です（第１位はモナコ、36.36%。2023年現在、GLOBAL NOTE発表）、また不登校児童・生徒は約35万人（2023年文部科学省調査）、15歳～64歳のひきこもりは約146万人（2022年内閣府調査）にのぼり、メンタルヘルスの問題も深刻です。さらに、働く人のストレスも深刻化しています。2023年労働安全衛生調査（厚生労働省）によると、現在の仕事や職業生活に関することで、「ストレスを感じる事柄がある」と回答した働く人の割合は82.7%に達しました。企業の健康経営の観点から、国は2027年までに、この数字を50%未満に抑えることを目標としています。
今回は、芸術文化活動の場の一つである博物館を取り上げ、「健康、ウェルビーイングの場」としての新たな価値創造に向けた研究を紹介したいと思います。

博物館浴って何？



「博物館浴」とは、「海水浴」「温泉浴」「森林浴」のように、「博物館での作品鑑賞やその空間にいることで、ココロとカラダが癒される。つまり、人々の健康増進や疾病予防に役立つ活動」という考え方です。
皆さんは、年間に何回くらい博物館（美術、歴史、考古、民俗、自然史などを扱う施設の総称）に行きますか？
日本には約5,700館の博物館があります。しかし、国民一人が1年間に訪問する回数は、平均2.1回です（2024年度文部科学省：社会教育調査）。たくさんの博物館が積極的に活用されているとは言えません。
超高齢社会、ストレス社会の真っ只中の日本で、人々が健康・ウェルビーイングな日々を送るために、博物館にできることはないのでしょうか？
そこで今回は、博物館の新たな価値として注目される、「博物館浴」を紹介します。

「博物館処方箋」が発行されている国がある？

カナダ、スイス、ベルギー、台湾では医師が処方箋に「博物館」と書くという、画期的な取り組みが始まっています。カナダでは10年に及ぶ実証実験を経て、2018年11月から開始。カナダ最古の美術館、モントリオール美術館（1860年開館）とカナダ・フランコフォニー医師会が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、全て無料で美術館に入館し、芸術文化による健康効果を享受できるようになりました。

海外で進む「博物館と健康・ウェルビーイング」の研究

ロンドン大学	ウェストミンスター大学	ローマ・トレ大学
芸術文化活動が多い人ほど長生き	**働く人の昼休みアート鑑賞ストレスホルモン正常化**	**美術の鑑賞で最高血圧が低下**
50歳以上の地域住民約6,700人を対象に14年間にわたり、「芸術文化活動の頻度と死亡率との関連」をテーマに調査を行った結果、芸術文化活動に親しむ機会（博物館、アートギャラリー、劇場などの鑑賞や観劇）が多い人ほど長生きするという報告をしました。(Daisy Fancourt et al.2019)	ロンドンの働く人を対象に、アートギャラリーへの昼休みの短時間見学前後で、ストレスホルモンの指標になる、副腎皮質ホルモン「コルチゾール」検査を行いました。見学前はかなり高い値を示していましたが、見学後は正常値に戻っており、昼休みの短時間見学だけでも、5時間の休息に値するストレスの軽減になることが明らかになりました。(Angela Clow et al. 2006)	血圧と脈拍数という生理面から、現代美術と具象画の鑑賞前後の変化を調べました。その結果、具象画を見学したグループは収縮期血圧（最高血圧）が有意に低下したと報告しました。(Stefano Mastandrea et al.2019)

子ども・若者の6人に一人がメンタル不全を抱える英国では、健康問題や社会的課題に対する博物館の新たな役割に関心が高まっています。英国博物館協会のウェブサイトでは、「Museums Change Lives（博物館は人生を変える）」というメッセージを掲げ、「博物館は私たちの幸福感を高める場」と明記しています。欧米では、「博物館と健康・ウェルビーイング」の研究は大いに進み、「社会的処方」の場として活用されているのです。

Innovate MUSEUM
「健康社会」実現を目指した、国際的「博物館浴®」ネットワークによる社会課題解決事業（中核館：九州産業大学美術館）
令和7年度 文化庁「Innovate MUSEUM事業」実施報告書

8 英国における先進事例調査
（子ども・若者などのメンタルヘルス支援プログラムの実地調査）

■ 調査期間：2025年9月28日～10月2日
■ 調査団員：名古屋大学博物館/梅村綾子、九州大学未来社会デザイン統括本部/緒方胤浩、九州産業大学美術館/中込潤、九州産業大学地域共創学部/緒方泉

調査報告❶ 名古屋大学博物館　梅村 綾子

今回の調査では、ロンドンおよびカンタベリーに所在する博物館を訪問し、健康・福祉・包摂をテーマとした取り組みを視察した。各館では、地域住民や特定のニーズを持つ人々に向けた多様なプログラムが展開されており、博物館が「社会的なつながりの場」として機能していることを実感した。以下に、① Wellcome Collection、② Wallace Collection、③ V&A East Storehouse、そしてカンタベリーの ④ The Beany House of Art & Knowledge、⑤ Canterbury Roman Museum、および ⑥ Canterbury Cathedralを訪問した際の調査記録を報告する。

① Wellcome Collection 調査記録
（訪問日：2025年9月28日）

1. 概要

Wellcome Collection（図1）は、health and human experienceをテーマとした無料の博物館・図書館である。公式ウェブサイト（https://wellcomecollection.org/）上で、アクセシビリティや情報保障に関する詳細が丁寧に整理されており、来館前から利用者が安心して準備できるようになっていた。館内でも、各展示室および図書館エリアの入口に「アクセシビリティ情報コーナー」が設けられており、情報保障が徹底されている点が印象的であった。

図1. Wellcome Collectionのエントランス

2. アクセシビリティと情報保障

館内で特に特徴的だったのは、来館者一人ひとりの感覚特性や状態に配慮したツールや情報が整理され、必要なタイミングで取得できるようになっていたことである。

図2のようにアクセシビリティガイド、センサリーマップ、サポートツール（ノイズキャンセリングヘッドフォン等）が各展示室の入口に常設されていた。こうした取り組みは、単なる設備的配慮に留まらず、「安心して展示体験に臨める環境」そのものをデザインしているように感じられた。

図2. 展示室入口にアクセシビリティと情報保障のコーナーが常設されている

3. Temporary Exhibition「Thirst: In Search of Freshwater」

今回訪れた企画展「Thirst」は、特に以下の点で印象的であった：

- “渇き”という誰にとっても身近な感覚を入口に据え、鑑賞者の身体的記憶と深く結びつけながら構成されていた。
- “水”の問題を、単なる環境問題としてだけではなく、政府の不作為、インフラの不平等、社会的課題へと接続していた。
- 展示の語り口は押しつけがましいものではなく、鑑賞者自身が「自分ごととして立ち止まる」構造となっていた。
- 最後には、環境・政治・社会の三層が絡み合う複雑な問題に対して、来館者自身が考え、問いを持ち帰るよう促すメッセージが提示されていた。

展示のナラティブ構成やキー・メッセージは洗練されており、「環境問題を身体感覚に結びつける」という斬新なアプローチが特に印象深かった。

4. 健康・身体・社会のつながりを示す展示デザイン

Wellcome Collectionの展示はいずれも、「健康とは何か」「人間の身体性とは」「社会との関係性とは」といった問いを投げかける構造になっていた。健康を単なる医学的概念ではなく、文化・社会・個人の経験と重ね合わせて捉え直すことを目的としており、“多層的に考えるための場”として機能していた。

5. 得られた示唆

- アクセシビリティは情報保障・環境づくり・展示構成の三要素が統合されて成立する。
- 身体的・感覚的経験を展示の導入に用いることで、社会課題への理解を深める仕組みが作ることができる。
- 博物館は、鑑賞者自身の経験と社会問題をつなぐ「思考の媒介装置」となり得る。

② Wallace Collection 調査記録
（訪問日：2025年9月28日）

1. 概要

Wallace Collection（図3）は、14～19 世紀の絵画、家具、武具、陶磁器など、多岐にわたる美術工芸品を所蔵するロンドンの美術館であり、無料で入館できる。歴史的邸宅を舞台に展示が構成されており、常設展を中心に、テーマ別ツアーや専門家による解説プログラムなど、幅広い来館者に対応したプログラムが提供されている。

図3. Wallace Collection エントランス

2. アクセシビリティと情報保障

館内では、案内サインやツアー情報が分かりやすく配置され、来館者が目的に応じて鑑賞しやすい環境が整備されている。無料のデイリーハイライトツアーやテーマ別ガイドが提供されており、美術館へのアクセシビリティ向上に寄与していると言える。

3. 健康・身体・社会のつながりを示す展示デザイン

Wallace Collection では、対話型・参加型の鑑賞プログラムが積極的に取り入れられている。認知症の方々を対象とした「Out of the Frame」プログラムも実施されている（今回の出張では参加していない）。美術を通じたコミュニケーションや心身の活性化を狙う取り組みであり、Wallace Collection の多面的な活用価値を示す好例である。来館者は作品を前に、自身の経験や感情、記憶を語り合うことで、作品を個人的な意味と結びつけながら理解することができるだろう。

4. 得られた示唆

- 対話型・参加型プログラムは、来館者の主体性を引き出し、博物館を社会的つながりの場として機能させる。
- 認知症者向けプログラムなどの包摂的活動は、博物館が福祉やウェルビーイングに貢献する可能性を示す。
- 専門性と来館者の個人的経験をつなぐ展示構成は、多様な来館者の理解と参加を促進する。
- 歴史的空間や文化資源を活用したプログラム設計は、現代社会における博物館の価値を拡張する。

③ V&A East Storehouse 調査記録
（訪問日：2025年9月29日）

1. 概要

V&A East Storehouse（図4）は、Victoria and Albert Museum の一部で、収蔵庫や保存・修復の現場を来館者に公開している。2025年5月にオープンしたばかりであり、まるでIKEAの倉庫を思い描くような斬新な展示方法が取られていた。

図4. V&A East Storehouseのエントランス

収蔵品の裏側にある作業過程や専門家の活動を見せることで、美術館の舞台裏を体験できる点が特徴である。

2. アクセシビリティと情報保障

館内は来館者が自由に回遊できるよう設計されており、展示品へのアクセスや情報提供が工夫されている（図5）。各コーナーには解説パネルやスタッフの案内があり、専門知識がなくても収蔵庫や保存作業の意義を理解できるようになっている。

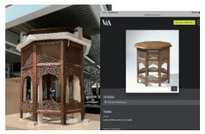


図5. 展示品の紹介方法

3. 健康・身体・社会のつながりを示す展示デザイン

V&A East Storehouse では、来館者が自らのペースで収蔵庫を巡り、展示品や修復作業に触れることができる。これにより、単なる鑑賞にとどまらず、制作・保存・修復のプロセスを体感することで、作品や文化財の価値を身体的・感覚的に理解することができる。

また、学芸員や保存修復専門家の仕事ぶりが見える化されており、「もの」にとどまらず「人」にフォーカスしているとも感じられた（図6）。専門職の役割や責任を知ることで、博物館と社会とのつながりを考える契機にもなる。

図6. David Bowieコレクションと、学芸員の仕事ぶりを上方から見学

4. 得られた示唆

- 博物館の舞台裏や専門家の活動を可視化することで、来館者の理解と関心をより深めることができる。
- 自由に回遊できる体験型展示は、身体的・感覚的な学びを通じて、文化財の価値や社会的意義を実感させる。
- 専門性の高い職務を来館者に見せることで、博物館運営の多面的な価値を伝える手法となる。
- 展示空間の自由度や参加の余白を設けることで、来館者自身が学びや発見を能動的に作り出せる構成となっている。

④ The Beany House of Art & Knowledge 調査記録（訪問日：2025年9月30日）

1. 概要

The Beaney House（図7）は、1899 年に設立されたカンタベリー中心部に位置する無料の博物館・図書館で、地域社会に密着した多機能文化施設である。

図7. The Beany Houseのエントランスと、Kids in Museumの Family Friendly Museum Awardへのノミネートを報告する垂れ幕

ここでは、当館のスタッフMitchさんとLyanさんにご案内いただいた。博物館は「人」「職業」「日常生活」をテーマに展示を構成しており、来館者は展示物の背後にある物語や地域コミュニティの活動に触れることができる。館内のスタッフとの交流や図書館の快適な空間も来館者の体験を豊かにしており、すべての人が背景や能力にかかわらず参加できるようデザインされている。

2. アクセシビリティと情報保障

館内は多様な来館者が快適に利用できるよう配慮されている。例えば、

- 聴覚体験用ツール（Listening tools）は視覚障害者だけでなく、すべての来館者が音を通じて展示物に触れられる。
- Outreach bags を用意し、来館できない人々にも博物館体験を届けている。
- SEND（特別な支援が必要な人向け）のための専用バッグや教材も整備。
- ビジュアルストーリー、耳あて、落ち着くための素材など、さまざまな感覚に対応した資料も提供されている。

3. 健康・身体・社会のつながりを示す展示デザイン

The Beaney House の展示と運営は、物自体ではなく「人」を中心に据えることを重視している。入口近くの展示室は柔軟に改装され、開かれ、あらゆる来館者が自由に交流できる空間となっている。

- 開かれた自由空間で、スタッフによる監視がなくても来館者は読書、工作、自由な滞在が可能。
- 館内で来館者が歌ったり拍手したりしてイベントに参加できる。
- 昔懐かしい人形を展示することで、認知症ケアをはじめ、過去の記憶を呼び覚ます対話を促す。
- 伝統的肖像画の奥には現代の社会課題を象徴するような人物の肖像画を展示。地域コミュニティを代表する人物（市民が誇る紳士、LGBTQ+、視覚障害の子どもなど）であれば、なおさら語り合いの場に意味が生まれる（図8）。

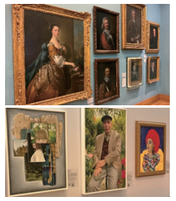


図8. 肖像画の展示

これらのデザインは、地域コミュニティの声を反映し、訪れる人々同士や展示物とのつながりを生むことを目的としている。

4. 得られた示唆

- アクセシビリティは、情報保障・環境づくり・展示構成の三要素が統合されて初めて成立する。
- 展示の導入に身体的・感覚的経験を取り入れることで、来館者が社会課題や地域の多様性に主体的に関わる仕組みを作れる。
- 博物館を「人中心」に設計することで、コミュニティの形成や人と人のつながりを促進できる。
- 開かれた自由空間と多様な体験素材の提供は、精神的なウェルビーイングや社会的包摂にも寄与する。
- 来館できない人へのoutreachや多様なコミュニティの表象を取り入れることは、博物館の社会的役割を拡張する手段となる。

⑤ Canterbury Roman Museum 調査記録
（訪問日：2025年9月30日）

1. 概要

Canterbury Roman Museum は、カンタベリー中心部に位置する無料の博物館で、ローマ時代のタウンハウス跡に建てられている。床のモザイクは現地保存されており、2000年以上の歴史を背景に、ローマ人の日常生活や家庭文化を体験できる展示が揃っている。

2. アクセシビリティと情報保障

館内のテキストや解説パネルは読みやすく、情報量も適切に調整されている。来館者は子どもから大人まで、初めての訪問者でも内容を理解しやすい。展示は分かりやすい文章と図を組み合わせ、手を使って学ぶ体験（ハンズオン学習）も豊富に提供されている（図9）。Lyanさんが、この博物館を「伝統的」と表現していたことも印象的だった（The Beany Houseが斬新だった）。

図9. Canterbury Roman Museumのハンズオン学習

3. 健康・身体・社会のつながりを示す展示デザイン

Canterbury Roman Museumの展示は、来館者がハンズオン展示やワークショップを通して実際に触れながらローマ時代の生活を体験できるよう構成されており、とりわけ子どもや家族が直接関わる身体的・感覚的な経験を学習の導入として重視しているように感じられた。さらに、生活道具や住居の再現展示を通じて、当時の社会構造や日常生活への理解を深め、歴史を抽象的な過去ではなく、現在の生活と連続する身近なものとして捉えられるよう工夫されている。

4. 得られた示唆

- ハンズオン学習や体験型展示を通じ、来館者の主体性と理解を高めることができる。身体的・感覚的体験は、抽象的な歴史情報を身近なものとして理解させる有効な手法である。
- 子どもや家族を対象とした参加型デザインは、教育的価値と社会的つながりの形成を同時に促進する。
- 情報の提示方法（テキスト量・文字サイズ・図解）は、学習効果とアクセシビリティの両立に重要である。
- 過去の生活や社会構造を展示することで、来館者が現代社会とのつながりや歴史的課題を再認識できる場となる。

⑥ Canterbury Cathedral 調査記録
（訪問日：2025年9月30日）

1. 概要

Canterbury Cathedralは、597年に創建され、1070年代に再建された、イングランドで最も古いキリスト教建築物の一つであり、世界遺産にも登録されている。長い歴史の中で築かれたゴシック建築、ステンドグラス、彫刻群が、宗教文化の変遷を視覚的に伝えている。

2. アクセシビリティと情報保障

大聖堂は歴史的建造物であるため、段差や狭い通路など、物理的バリアが多く残る。しかし、可能な範囲でエレベーターや補助設備が整備されており、特に視覚障害者向けの“Touch & Hearing Centre”や、触察体験（タクタイル体験）、ガイドツアーが用意されている（今回は利用していない）。

3. 健康・身体・社会のつながりを示す展示デザイン

ゴシック建築やステンドグラスといった壮大な建物を空間移動する、という体験をもとに歴史に触れられる構造となっている（図10）。訪問者に精神的・感覚的な体験を提供し、宗教文化の歴史的意味を体感的に理解する場となっている。宗教背景を知らない来館者には内容が難しく感じられる部分もあるが、触察展示やガイドツアーなどのサポートを利用すれば、そのギャップも補えるだろう。

図10. Canterbury Cathedralの外観と内部空間の一部

4. 得られた示唆

- 歴史的建築物は物理的制約が大きいが、部分的な補助手法（触察展示、音声サポート、ガイドツアーなど）によってアクセシビリティを向上できる。
- 宗教・文化背景の理解を促すためには、多感覚的な導入やナビゲーションが重要である。
- 建物そのものを展示として体験させる手法は、時間・文化・空間のつながりを強く感じさせる学習効果を持つ。
- 利便性の制約がある環境でも、「できる部分からのアクセシビリティ改善」が来館者の包摂性を高める。

調査報告❷ 九州大学未来社会デザイン統括本部 緒方 胤浩

以下に、①V&A、②Science Museum、③Young V&A East、そして④London Museum Docklandsを訪問した際の調査記録を報告する。

① Design and Disability@V&A 調査記録
（訪問日：2025年9月28日）

ヴィクトリア&アルバート博物館（V&A South Kensington）で2025年６月から2026年２月まで開催の特別展「Design and Disability」では、さまざまな障害のある人々が、生きるために自らの経験や専門性を通じてどのようにデザイン実践を行なってきたかを紹介する。「Visibility」「Tools」「Living」の３つのセクションにおいて、デザイン、アート、建築、ファッション、写真など170作品が展示されていた（観覧料は大人£16）。

この展示会場で特徴的だったのは、セクションごとに異なるフェルト生地の凹凸形状が施された椅子やテーブル、展示台だった。また、キャプションの文字を大きく印刷してまとめた冊子や、写真を添えて展示の流れや代表的な展示物などを説明するビジュアルストーリー、会場構成を触覚で把握できるマップ、イントロダクション映像に表示された字幕と手話通訳、子どもや車椅子利用者も見やすい高さのキャプションなどが用意されていた。これらは、V&A以外の展示会場でも一般的に用意されていたが、多様な来場者に開かれた展示を実現するための要素が網羅されていた（図１）。

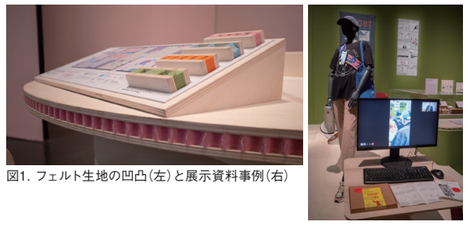


図1. フェルト生地の凹凸（左）と展示資料事例（右）

展示については、健常者から障害者に向けられる哀れみに対抗する意図を込めた「Piss on pity」Tシャツや、障害者のアクセス向上のために作られたことをマーケティングにおいて隠し、一般向けにハンズフリーの利便性を謳ったスニーカーなど、多様な作品を見ることができた。また、3Dプリンターでつくった補助具、デジタルデバイスを駆使してデモに遠隔で参加する方法なども紹介されていた。そうした多様な作品群を通して、障害者を不可視化せず、独創的な取り組みを発信することなど、クリエイティブヘルスの観点からも包摂的な博物館を目指す際に果たすべき役割や姿勢について、多くを学ぶことができた。

② Future of Food@Science Museum 調査記録（訪問日：2025年9月28日）

科学博物館の企画展「Future of Food」は、2025年7月から2026年1月まで開催され、科学がどのようにより持続可能な食料生産、調理、そして食事の方法をつくっていくかを扱った無料の展示。科学博物館自体は入場無料だが、大人は£5以上の寄付を推奨されていた。

展示内容は、導入でフードシステムを簡潔に説明し、日々の生活で目にする食品の背後に広がる食産業や環境コストに目を向け、より望ましい食の未来について考えさせるものだった。具体的には、穀類の単一種栽培や集約的な畜産業、ハーバー・ボッシュ法、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』から、発酵技術の歴史と応用、オーガニック食品運動、さまざまな植物由来食品、細胞から肉を育てる方法、食料主権、持続可能な養殖まで、多岐にわたる内容を網羅的かつ客観的に展示していた。

また、「The Green Revolution was both a miracle and a disaster.」という壁面のメッセージに代表されるような科学技術倫理に触れる問いかけや、細胞性食品を食べたいかを問う投票マシーン（Yesがやや優勢だった）の設置など、議論を促すことと、そのために情報を適切に提供する姿勢に好感を覚えた。

さらに、常設展においても同様に、科学技術の担い手である「Technician」にフォーカスしながら技術要素を知ることができるような内容が多く、子どもたちの興味関心と社会で働くことをつなぐナラティブがとても意識的に設計されているように感じた（図2）。

図2. 展示空間（左）と展示資料事例

③ Young V&A 調査記録（訪問日：2025年9月29日）

Young V&Aはヴィクトリア&アルバート博物館（V&A）の分館として、紀元前2,300年から現在に至るまでの2,000点以上の作品を扱い、「PLAY」「IMAGINE」「DESIGN」の3つのギャラリーで展示する無料の博物館。1872年にベスナル・グリーン博物館として開館し、第1次世界大戦後に子ども向けの展示室を拡大した歴史を持ち、その後のV&A Museum of Childhoodから3年間の閉館と改修を経て、2023年夏に再開された（図3）。

図3. エントランススペースの壁面（左）とメインスペース（右）

5年間にわたる調査と設計、そして地域に住む子どもや家族、学校からの意見を踏まえて改修は行われており、文字通り子どもとその家族に開かれた場になっていると感じた。それは子どもたちが悠々と走り回れる広々としたメインホール、遊具的でインタラクティブな展示、赤ちゃんを寝かせられるほど奥行きのあるベンチ、ベビーカーを置くスペースが広く確保されているなどの空間的な要素に限らなかった。展示ケースには作品の説明に加えて、「窓の外を見て、今日の空は何色？」という簡単なものから「きみの好きな食べもの用に何か特別なものをデザインするとしたら？」という少し考えさせる問いかけまでがいくつも散りばめられ、見るだけでなく考えるきっかけを豊富に提供していた。また、遊びが心と身体の動きを引き出すことの意味や、エシカルファッションとは何か？などの端的な解説も丁寧に提供され、大人から子どもへの語りかけや、学齢の高い子どもの学びもフォローしていることが特徴的だった。

そして何より、「Welcome, Creativity lives here.」と書かれたエントランスの言葉に象徴されるように、創造力や独創性を刺激し、それらを受け入れ、拡げていくような場としての博物館の姿勢が大きな魅力だった。

④ London Museum Docklands 調査記録（訪問日：2025年9月29日）

London Museum Docklandsは、南北アメリカ大陸に挟まれたカリブ海域にある西インド諸島からの産品を保管するために1802年に建てられた倉庫を改修した、入場無料の博物館。ローマ時代の入植から博物館周辺の金融街カナリー・ワーフ地区の1980年代の再開発に至るまで、首都ロンドンが港湾都市として歩んできた長い歴史を、貿易・移民・商業の物語を通じて紹介していた。

特に、これまで見過ごされてきた貿易と奴隷の関係に焦点を当てた一連の展示「London, Sugar & Slavery」に注目した。この展示そのものは2007年から公開され、イギリスの貿易と奴隷にされたアフリカの人々に向き合う国内では数少ない常設展示の一つである。この空間においては子ども向けの平易な説明文と「○○の地図を探してみよう」など能動的な学びを促す文章が用意されていた。一方で、この文章は子どもが座って見るような目線の高さに設置されており、家族でしゃがみ込んでゆっくりと対話するための仕掛けのように見受けられた。

さらに展示の終盤には「Holding Emotions」と名付けられたスペースが設置されていた（2024年2月から2026年2月まで公開予定）。これは、展示を見ることで生じる怒りや驚き、不安、失望、共感、あるいは無関心など複雑な感情に向き合い、ほかの鑑賞者と考えや想いを共有するための機会を提供していた。メンタルヘルス関連の慈善団体「Mind」やウェルビーイング支援の慈善団体「Taking Shape Association」と博物館が協働し、フレームワークなどを活用して設計されていた（図4）。

図4. Holding Emotionのスペース（左）と展示資料事例（右）

また、博物館全体の最後の部屋として「Reflection Room」という場所も設けられていた。このような振り返りの場が用意されることで、見て終わりにせず、出口の一歩手前で立ち止まることができる。また来館者が気づきを共有することで、一人で鑑賞していても他者とつながることができる。こうした仕掛けは、博物館と日常との接続を円滑にする上でも重要な役割を果たしているのではないかと感じた。

調査報告❸ 九州産業大学美術館　中込 潤

以下に、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーを訪ね、同ギャラリーのジェーン・フィンドレーさん、ロンドン市の文化・健康・ウェルビーイング部門の責任者を務めるクレア・ラヴォットさん、キッズ・イン・ミュージアムズのエグゼクティブ・ディレクターを務めるアリソン・ボウヤーさん、そして芸術文化と健康に関するプロジェクト“SHAPER（芸術介入健康プログラムの拡張：実施と有効性の研究）”を主導するキングス・カレッジ・ロンドンのニッキー・クレーンさんと面談した記録を報告する。

ジェーン・フィンドレーさん（訪問日：2025年10月1日、2日）ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーにて

ジェーンさんとは2026年1月に行う国際シンポジウムについての打ち合わせを行ったほか、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの敷地内に新設されたばかりだという彫刻庭園とアートプレイスペースについて案内していただいた。

コロナ禍でギャラリーが閉館していた間もギャラリーの庭園は開放しており、多くの人々が自由にその空間を利用している様子から、この空間をさらに充実させることで、地域コミュニティの家族や住民に提供できる貴重な資源になると感じ、2020年、庭園を遊びや交流の機会を生み出すインタラクティブな彫刻庭園へと変えるプロジェクトに着手した。周辺の生け垣を撤去し、子どもたちが駆け回ったり、転がり降りたりできるよう、牧草地にランドアートを設置した。さらに庭園全体に多くの彫刻を設置した。どれもここで時間を過ごし、屋外空間を楽しむことを促すものであり、屋外にいることの健康効果やアートについて考え、それを最大限に活かすことを念頭に置いているという。

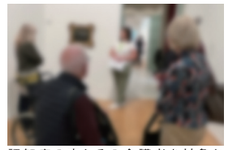
また同時に「アートプレイパビリオン」と呼ばれる、所蔵品のイメージを元にアーティストとともに設計した、アートプレイスペースも創設した。これは特に8歳以下の子どもたちのための感覚遊びを目的としており、感覚的に絵画を生き生きと体験できる場を提供している。この地域には多くの若い家族が住んでいるが、創造的な遊び場となるような場所があまりなく、アートプレイスペースの新設はそのニーズに応えるものでもある。さらにこれは家族だけでなく学校も対象としたもので、平日は地域の学校が利用している。

調査チームがダリッチ・ピクチャー・ギャラリーを訪ねたのは平日の午前中だったが、犬の散歩や、ジョギング、親子連れなど多くの人々が庭園内を自由に散策している様子が見られた。また敷地内のカフェも朝から賑わっており、同ギャラリーが、地域住民にとって非常に過ごしやすく、住民の生活の中に取り込まれている印象を受けた。また、認知症の方とその介護者を対象とした対話型のガイドツアーも見学させていただき、ハード面、ソフト面いずれにおいても、あらゆる人が有意義にアートと関わることのできる場の創出に意欲的に取り組んできた同ギャラリーの姿勢を強く感じた。

朝から多くの人で賑わうギャラリーの敷地内にあるカフェでジェーンさんに話を伺った。

ランドアートと屋外彫刻。子どもたちが走り回れる広々とした空間となっている。

アートプレイパビリオンの中の様子。アートプレイホストという専任のスタッフを配置し、訪れる家族らをサポートする体制を整えている。


認知症の方とその介護者を対象としたガイドツアーの様子。参加者がファシリテーターと楽しく会話をしながら作品を鑑賞する。

クレア・ラヴォットさん（訪問日：2025年10月1日）
ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーにて

ギャラリーの敷地内にあるカフェのテラス席でクレアさんに話を伺った。

クレアさんはロンドン市長を長とする地域統治機関であるグレーター・ロンドン・オーソリティー（GLA）の一員として働いており、ロンドンのクリエイティブ・ヘルス・シティ事業にも取り組んでいる。今回特にクリエイティブ・ヘルスに関する取り組みの近況ついて伺った。医療サービスは治療から予防への転換が提唱され、クリエイティブ・ヘルスはその解決策の一部であるが、これは巨大な組織を方向転換させる作業となる。そのため地域間の格差や能力不足を解消すべく、市長ネットワークを立ち上げるなど、クリエイティブ・ヘルスを推し進めるための準備を整えているが、共通基盤をどのように形成していくかなど、まだ課題も多いようである。

NHSの新たな10年計画はクリエイティブ・ヘルスを導入する絶好の機会であるが、現時点でNHS（国民保険サービス）では博物館や文化分野で実施している予防支援や地域レベルでの活動について多く言及しているもののクリエイティブ・ヘルスという言葉はまだ使われていない。そこでこの用語を計画に盛り込むようロビー活動などを通して働きかけている。クレアさんは「文化は人権である」という。あらゆる形で、弱い立場にあるロンドン市民が文化にアクセスできるよう保証するために、様々な課題に挑む彼女の力強い言葉が印象的だった。

アリソン・ボウヤーさん（訪問日：2025年10月1日）
ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーにて

ギャラリーの敷地内にあるカフェのテラス席でアリソンさんに話を伺った。

アリソンさんにはキッズ・イン・ミュージアムズのマニフェストについて詳しく話をうかがった。キッズ・イン・ミュージアムズは、様々な活動を通して家族連れがミュージアムで過ごしやすい環境を作ることに寄与しているプロジェクトで、2003年の発足以来、来館者らの意見を反映したマニフェストを作成、公開している。これは2年ごとに更新されており、現在のマニフェストは2025年2月に更新されたものである。マニフェストを作成するために直近では、約250世帯と約100人の若年層（14～25歳）を対象に調査を実施した。さらに博物館にほとんど行かない、あるいは全く行かない層にも確実にリーチしようと、通常なら調査に回答しない層にもアプローチを試みた。そのために世論調査会社を利用し、ロンドン郊外の労働者階級や低所得層から対象者を選び実態を探った。料金に関する多くの意見があがったが、興味深いのは、家族連れが「無料が常に最善」とは言っていない点である。彼らは「出かけた日に費用対効果を感じられる充実した体験」を求めている。同時に、料金体系の透明性や、ウェブサイトで全ての費用を確認できることが非常に重要だと指摘している。つまり、入場料だけでなく、カフェでの昼食代、駐車場の有無や有料スペースの有無など、全てを事前に把握して予算を立て、気まずい思いをせずに済むようにしたいのである。

その他、博物館の暗黙のルールについての意見が多数あがった。特に幼い子ども連れの来場者にとって、これらは大きなストレス源となる。家族は叱られる前に、何に触れていいか悪いかを理解したい。つまり、子どもたちが安全に動き回れて、怒鳴られる心配もない場所に行けるという点が、多くの家族にとって非常に重要である。ウェブサイトやニュースレターについても、多くの意見が寄せられた。そして、増えつつある意見として、実際に博物館を訪れた際、子どもたちがタッチスクリーン式のインタラクティブ装置で遊ぶことだけが目的であってほしくないという声がある。触ったり読んだり描いたりといった、かなり基本的なものを望んでいる。これは、ハイスペックなデジタル体験よりも重要になりつつある傾向で、興味深い点である。

このほかにもアリソンさんからは、調査から得た様々な意見を伺った。キッズ・イン・ミュージアムズでは、こうした意見を受け止め、マニフェストにまとめると同時に、博物館が活用できるリソースを作成している。具体的には二つの自己評価ツールで、一つは家族向け、もう一つは新たに開発した14～25歳向けで、各施設で活用してもらうのが目的である。

現在、1,000を超える博物館、遺跡、文化団体がキッズ・イン・ミュージアムズのマニフェストに賛同、署名している。マニフェストが非常に綿密な調査の上で、各施設が活用しやすいように更新されていることが、今回のインタビューでよく分かった。そして、そうした地道な活動がミュージアムの在り方に一石を投じる大きな力となっている。

ニッキー・クレーンさん（訪問日：2025年10月2日）
ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーにて

ニッキーさんが携わっているSHAPER（Scaling-up Health Arts Programmes: Implementation and Effectiveness Research［芸術介入健康プログラムの拡張：実施と有効性の研究］）は、ロンドンの南西エリアを対象に、心の健康のための芸術に基づいた介入の効果と拡張性を探ることを目的としている大規模な研究プロジェクトで、医療研究財団のウェルカム・トラストの助成を受けている。研究は産後うつ・産前産後の心の健康、パーキンソン病、脳卒中をテーマとする3つの芸術介入プログラムが対象となっている。「産後うつの母親と歌おう」というプログラムについては、それらの成果に関する論文が近々公開される。このプログラムでは、母親の産後うつへの影響だけでなく、赤ちゃんとの絆の形成にも影響するという。唾液サンプルなどを採取し、絆の形成を調べるためにオキシトシンの値なども測定しており、このプロジェクトの次の段階として、ウェルカム・トラストに再び助成金を申請する予定である。また、これらのプロジェクトは世界中のパートナーと連携して進めていく計画で、南米、南アジア、アフリカといった地域も視野に入れ検討している。

イングリッシュ・ナショナル・バレエ団との「パーキンソン患者と踊ろう」というプログラムでは、ダンスがパーキンソン病の身体的・精神的症状に与える影響を検証することが目的で、これには、社会的つながり、身体活動、新たな技能習得、モチベーション向上といった要素がある。これらの研究に関しても論文が公開される予定だが、歩行バランスに関して全体的に良好な結果が出ているという。歩行バランスの他、不安や抑うつ、そして特に生活の質（QOL）においても、結果については現在も統計解析を継続中である。パーキンソン病プロジェクトに関して、臨床医からは、もし資金がもっとあれば、非運動症状の幅広い領域で非常に有力な結果が得られるだろうとニッキーさんは聞いており、この非運動症状の領域こそが彼女らの主要な目標である。そのため、パーキンソン病研究の次段階として、現在資金調達を進めている。脳卒中のプログラムに関しては、一連のプロジェクトの中での成果の一つとしてピア・アンバサダーというグループが結成されたことを伺った。彼らは当事者体験を持つ人々で、当事者体験を持つ人々が他者と経験を共有し、参加を促す。脳卒中を経験した人々が、孤立しがちな人々を訪ねて交流を深め、結びつける役割を果たす。英国では、病院を退院するとその後のケアは期待できない。そして精神的・身体的に崩れてしまう。今や数百人規模の脳卒中経験者たちが、新たに発症した人々とネットワークを築き、芸術ワークショップへ招き入れ、彼らを奮い立たせている。動機付けはこれらの研究において極めて重要な要素である。希望を抱かせ、可能性を感じさせ、ベッドから起き上がれる、自分なら実現できると思わせるその火付け役が大事であり、意欲の欠如、無気力という観点は極めて重大な要素である。脳卒中の論文も大事だが、ニッキーさんにとって最高の結果は実際に人材育成が進んだことだという。彼らが医療システムと協力することで人材基盤の拡大につながる。

脳卒中プロジェクトは国内各地で医療システムへの導入が成功している。つまり医療システムが費用を負担している。産後うつやパーキンソン病の分野でも、ある程度同様の取り組みが進んでおり、医療システムからどれだけ資金を得られるか模索中である。ウェルカム・トラストの助成金などに加え、医療分野からの資金調達を目指している。ニッキーさんらは、クリエイティブ・ヘルスと呼ばれる分野を、医療分野をはじめとし社会に実装してくため、様々な努力をしているが、資金調達は常に大きな課題としてある。いわば時代を先取りしているようなこうした活動に対して資金提供者の理解を得るのは困難が伴う。実際にこの研究を続けて成果を目の当たりにしているのに、資金提供者は「なぜこんなことを？」といった反応を示すことも多い。パーキンソン病のプログラムに関しても、ニッキーさんの個人的な感覚として、過去5～10年でこの分野の正当性を示す大きな進展はあったものの、「文化活動や創造的活動がパーキンソン病患者に大きな効果をもたらすはずがない」という疑念は根強く残っているという。一種の心理的障壁があると言える。たとえ他の臨床試験と遜色ない臨床試験の証拠を提示しても、「芸術が効果をもたらすはずがない」という先入観から、この壁は残っていると感じている。

資金調達は困難であるが、それを達成するために重要なのが、ネットワーク構築であり、ニッキーさんはその役割を担っている。誰が何をしているのかを把握し、協力関係を築き、プロジェクトを立ち上げ、プレゼンテーションを行い、新たなパートナーを見つける。こうして勢いを構築していく。単独では困難だからこそ、運動を創り出す感覚が重要で、その点、英国は成功していると彼女は感じている。市長室の同僚に電話をかけられる。ジェーンさんに直接話せる。芸術評議会の誰かと話せる。皆がつながっている。キングスクロスだけにとどまらず、ネットワークは英国全体に広がっている。ネットワークチームとの連絡は全国規模であるため主にオンラインで、「ナショナル・センター・フォー・クリエイティブ・ヘルス」を通じて行われている。「ナショナル・センター・フォー・クリエイティブ・ヘルス」は全国組織であり、ニッキーさんはそのアドバイザーを務め、委員会にも参加している。約2か月ごとに会合を開いており、これは全国的な連携を意味する非常に重要な会議である。その下に他のネットワークが存在する。これらの仕組みは、長い年月をかけて築かれたものであり、そこでは活発な交流がある。その会議には実体験を持つ人々、戦略担当者、資金調達担当者、医療システムの上級職員などが参加する。つまり、オンラインで、医療関係の上層部から地域密着で働く人までが一堂に会し話をする場があり、彼らと話すだけでこの分野がいかに洗練されているか気づくという。ニッキーさんの話から、クリエイティブ・ヘルスを推し進めるための資金調達の難しさを感じると同時に、実績を積み重ねながら、長い年月をかけて培ってきた、目的を同じくする幅広い分野の関係者によるネットワーク構築の重要さを感じた。

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの前で調査チームとニッキーさん。

9 国際シンポジウム

「2026九州産業大学国際シンポジウム」という名称で開催

シンポジウムチラシの表と裏

チラシ表面

チラシ裏面

テーマ：「英国の『Creative Health』の理論と実践を学ぶ」

【開催趣旨】

英国では創造性、文化芸術、そして伝統が私たちの健康と幸福を向上させ、公平性を高めるという考え方は広く受け入れられています。こうした考え方と活動は、総称して「Creative Health」と呼ばれています。ロンドン市は、子ども・若者を対象に「280万人の心」のプロジェクトという、文化芸術を活用したメンタルヘルスプログラムを提供しています。それは6人に一人がメンタル不全という状況があるためです。

我が国の状況も深刻です。不登校児童生徒は35万4千人（文部科学省調査）、若者のひきこもりは65万3千人（15歳～39歳、内閣府調査）にのぼり、68.3％の労働者が強い不安、悩み、ストレスを感じています（厚生労働省調査）。

しかし、我が国ではこうした深刻な課題の解決に向けた、「Creative Health」の実践事例がなかなかありません。それは、文化芸術に関する科学的データの蓄積がないためです。

2020年9月から、本学は「博物館浴®」実証実験を始め、現在までに全国100館以上の協力を得て、1,800名以上のデータから、「博物館のリラックス効果」を検証してきましたが、まだまだこれからです。

私たちは、海外事例を知る必要があります。本学は、これまで文化庁事業の採択を受け国際シンポジウムを開催し、海外事例を広く日本の博物館関係者と共有しながら、博物館の社会的価値を考えてきました。

今回は「英国の『Creative Health』の理論を学ぶ」ことから始め、2つの実践事例を聞きます。

1つ目はロンドン市が進める「280万人の心」のプロジェクト（Greater London Authority）、そして、2つ目はビーニー・ハウス博物館・図書館が実施するメンタル・ヘルス支援プログラムの一つ、「Mirror Mirror Project」です。

こうした理論と実践を聞くことで、国際シンポジウムに参加する、日本、英国の皆さんと一緒に、「子ども・若者」を支える「Creative Health」の可能性について考えましょう。

＊博物館浴：博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

■ 開催日時

2026年1月24日（土）18:00～20:30（オンライン開催）
＊英国現地時間/9:00～11:30

■ オンライン調整会場

九州産業大学総合情報基盤センター
（福岡市東区松香台2-3-1 中央会館3階）

■ 開催方法

❶ZOOMによるオンラインにて、日本、英国を同時中継して行う。❷（株）サイマル・インターナショナルによる同時通訳で行う。同時通訳アプリ「interprefy」の使用。

■ 参加者数

参加者数：123名（オンラインによる申込数151名）

【開催内容】

「英国の『Creative Health』の理論と実践を学ぶ」

■ 登壇者

◉ジェーン・フィンドレー（Jane Findlay）
英国：グリッチ・ピクチャー・ギャラリー /
Head of Programme & Engagement

◉クレア・ラヴォット（Clare Lovett）
英国：グレイター・ロンドン・オーソリティー /
Principal Project Development Officer

◉ミッチ・ロバートソン（Mitch Robertson）
英国：ビーニー・ハウス博物館・図書館 /
Museums and Programme Manager

■ 司会進行

緒方 泉（Izumi Ogata）/
九州産業大学地域共創学部特任教授

【スケジュール】

■開催の挨拶 日本時間 18:00
大日方 欣一（Kinichi Obinata）/九州産業大学美術館長

ジェーン・フィンドレー 18:05~18:25 20分（発表）
「英国における『Creative Health』の最前線」

クレア・ラヴォット 18:25~18:45 20分（発表）
「クリエイティブ・ヘルス・シティの構築：
ロンドン市のアプローチ」

ミッチ・ロバートソン 18:45~19:05 20分（発表）
「コレクションを共有し、帰属感を分かち合う：
健康を支え、人生を変える」

■休 憩 19:05~19:20

■質問を基にしたディスカッション 19:20~20:15

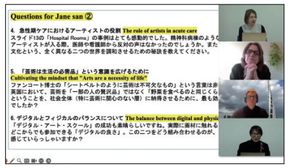
■3名の登壇者から、まとめのメッセージ 20:15~20:25
（1人３分程度）

■閉会の挨拶 20:25~20:30
大日方 欣一（Kinichi Obinata）/九州産業大学美術館長

ジェーンさん発表風景

クレアさん発表風景

ミッチさん発表風景



ディスカッション

オンライン調整会場①

オンライン調整会場②

参加者の国際シンポジウムへの期待の声（抜粋）

＊私は、美術館を社会教育・生涯学習の場として捉え、特に子ども・若者を対象とした学びや対話の実践について研究しております。本シンポジウムで取り上げられるCreative Healthの理論や、英国における文化芸術とメンタルヘルスを結ぶ実践事例は、現在の日本社会が抱える課題とも深く関わる重要なテーマであり、大変関心を持っております。

国際的な視点から、文化施設が地域住民や若者をどのように支え得るのかを学ぶ機会として、ぜひ参加させていただければと思っております。

＊文化芸術が生きていく上で、とても重要だと考えております。ただ現在において、それはある一部の人のためにあるという認識にとどまっているように思えてなりません。

特に子ども、若者にとっては、これから文化芸術が日常とともにあって欲しいと願います。

＊私は現在「ADHD特性を有する来館者」を対象とし調査研究を進めております。将来的にはそういった特性を背景として、不登校や引きこもりといった状態にある子どもたちを対象にしたいと考えており、博物館が彼らにとっての居場所になりうると捉えております。

そのような問題意識から、緒方先生が進められている「博物館浴®」のプロジェクトには、かねてより強い共感と興味を抱いてまいりました。

また、去年に続き、イギリスという先進的な実践の現場で活動されている方々とのシンポジウムが開催されるとのことで、この貴重な機会にぜひ参加し、学ばせていただきたく存じます。

＊不登校の子どもが増えていることを、保護者として日々実感しています。研究者としては、その状態をアートと関わることでポジティブに考えられないかと思っています。国際的な事例を伺い、勉強できれば大変ありがたく存じます。

＊現在、動物園の飼育員養成の専門学校の講師をしています。主に1年生を教えていますが、毎年クラスで数人が不登校になり辞めていきます。入学目的が明確な専門学校でも不登校になっていくことがとても残念です。Creative Healthの理論と実践を知ることで、彼らになんらかの手助けができればと思います。

＊日本社会が抱える不登校や引きこもり、メンタルヘルスの課題に対して、博物館がどのように人々の心を支える場になり得るのかに関心を持っています。実際に当館においても、博物館が誰かの心の拠り所となるために何が必要かを日頃から考えています。

本シンポジウムを通して、Creative Healthの先進国である英国の理論や実践事例から学び、今後の活動につながるヒントを得られることを期待しています。

＊英国におけるCreative Healthの理論的背景と、子ども・若者を対象とした具体的な実践事例を通して、文化芸術が心身の健康や社会的包摂にどのように寄与しているのかを体系的に学びたいと考えています。特に、行政・文化機関・医療・教育分野が連携する仕組みや、実践を支えるエビデンスの考え方について理解を深め、日本の地域社会や教育・保健福祉分野に応用するための示唆を得ることを期待しています。また、日本と英国の取り組みを比較しながら、今後のCreative Healthの可能性や課題について考える機会としたいと考えています。

＊健康とミュージアムが繋がることをどうやったら普及できるか学べたら嬉しいです。また、普段子どもたちと触れ合っていると、自身のメンタルヘルスに無自覚的である印象があります。彼らが自分を大切にし、そのために取るべき行動を取れるようにする方法について学べたら嬉しいです。

＊当館では、デイサービス施設と協働した展示鑑賞プログラムがあります。

アートセラピーのような立ち位置のもので、作品と対峙した時に思ったことを共有したり、静かで揺らぎや閉塞感が少ない「ミュージアム」という空間でただゆっくりと座って見たりするといった、「博物館浴」にも通ずる活動が主です。

当プログラムの参加層は、大半が18歳以上の成人であり、小中学生、幼児、親子はとても少ないです。

今回のシンポジウムに参加することで、Creative Healthの理論を学ぶとともに、学校外・家庭外にある博物館という場所のコミュニティや展示などを、どのように活かせば人生に彩を添えることができるか考え、子どもや親子の層にもあっているプログラム作りに反映していきたい。その上で、子どもや親子の層のプログラム参加者数を増やしたいです。

＊Creative Healthという考え方や、文化芸術を活用したメンタルヘルスプログラムが、英国の社会でどのように受け入れられてきたのかを知りたい。日本ではまだ受け入れられるのは難しい、あるいは反発があるのではと思う。

どのようにして、広く受け入れられるようになったのか知りたい、学びたい。

＊Creative Healthについて、しっかり理解したいと思います。日本ではCreative Healthは主に文化芸術とかかわるように論じられているように感じていますが、民俗資料、歴史史料を扱う博物館の取り組みなども知りたいと思います。

＊日本全体がメンタル不全に陥っている環境の中で若者支援に携わっています。他の国の取り組みや歴史を知りヒントを得たい。日本は、薬物治療に重きをおき、非薬物的なことに重きを置かない傾向があります。英国での考えを知る機会になると嬉しいです。

＊本シンポジウムでは、英国におけるCreative Healthの理論的枠組みと、それが実際の政策・現場実践としてどのように具体化されているのかを、体系的に学ぶことを期待しています。とりわけ、ロンドン市の「280万人の心」プロジェクトや、博物館・図書館を基盤としたメンタルヘルス支援の実践事例を通じて、文化芸術が子ども・若者の心身の健康や社会的包摂にどのように寄与しうるのか、その制度設計、運営体制、評価方法を具体的に理解したいと考えています。

また、日本においては、博物館や文化施設の社会的価値が、健康・ウェルビーイングの観点から十分に可視化できていない現状があると感じています。本シンポジウムを通じて、英国の知見と日本の課題を往復させながら、エビデンスの蓄積や多分野連携の可能性について議論し、今後の研究や実践、政策提言につなげる視座を得ることを期待しています。

＊東京と近しい大都市ロンドンで実践されるウェルビーイングの施策をミュージアムの取組みと関連付けて拝聴できる貴重な機会であると受け取りました。取組みや成果はもちろんですが、課題困難事例もあわせてお聞きできますと幸いです。

＊私は、現在、居場所を求めて繁華街に集まる若者の支援をしていますが、彼らの多くはメンタルに深刻な課題を抱えています。今後、文化芸術活動を若者に対するケアに活用したいと考えており、今回のシンポジウムでそのヒントを得られればと思っております。

＊所属する美術館では、リニューアルに向けて美術館の今後の姿について検討しています。

美術鑑賞という「学びの場」だけではない、市民の心豊かな生活を支える場として役割を担う場としての美術館についても検討しており、「博物館浴」の実証実験にも参加することにしております。このたびのシンポジウムに参加し、イギリスでの取り組みを知り理論と実践の知識を深め、今後の検討に活かしていきたいと思います。

＊MLA（Museum、Library、Archives）連携と言われていますが、地域社会の中で、博物館のみならず図書館などの社会教育施設がどのような役割を果たしているのか、また不登校の子どもたちを中心としたYA世代に実際にどう働きかけているのか、海外の先進的な取り組みを学びたいと思います。

＊図書館・博物館における社会的処方に関心があり、また緒方先生の博物館浴のお話しとも関連して伺えればと思います。英国の事例は知らないことばかりのため、楽しみにしております。

＊地域で博物館や図書館がどんな役割を果たすことができるか。このテーマがどんどん大きくなったのは、ここ10年ぐらいだと感じています。地域の社会教育に携わる中で、自分たちに出来ることをひとつでも多く見出せればと、このシンポジウムに期待しています。

＊勤務している資料館に図書室が併設されており、私自身も子どもの頃から学校以外の拠り所として利用していました。現在も子どもたちがよく利用しており、そこに資料館事業も含めて、子どもたちや地域の人たちのために今後何かできないかと考えています。今回のシンポジウムの内容を、その参考とさせていただければと思います。

【発表趣旨】「英国におけるCreative Healthの最前線」

発表者：ジェーン・フィンドレー（英国）
所属：ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー　職名：ヘッド・オブ・プログラム・アンド・エンゲージメント

私たち人間はいつの時代でも、物語や歌、絵画、パフォーマンスなどの芸術を通じて自らの人生で体験した出来事を共有し意味づけをしたいと願ってきました。私たちは他者に観てもらい聴いてもらいたい、そして互いにつながり合いたいという想いから、そのような芸術表現を行ってきたのです。このことは、新型コロナウィルスのパンデミックによって大きくクローズアップされ、芸術が果たす役割が再認識されるようになりました。私たちが、心身ともに健やかでいられるには、人とのつながりを築きコミュニティを作ることが必要で、その際に芸術が重要な役割を果たすことがあらためて明らかになったのです。

英国におけるCreative Healthとは

英国においてCreative Healthは、健康とウェルビーイングを支えるクリエイティブなアプローチや活動だと考えられています。私たちは全人的な意味での健康を、肉体的、精神的、社会的にすべてが満たされたウェルビーイングの状態として捉えています。そしてクリエイティビティ（創造性）を広い視点で取り扱います。Creative Healthの活動には、視覚的な芸術やパフォーマンス、工芸、映画、文学に加え、ガーデニングのような自然の中でのクリエイティブな活動も含めることが可能です。

また、Creative Healthでは医療・介護サービス、協働、教育や人材育成の取り組みにおいて、クリエイティブで革新的な方法を取り入れています。それは、家庭やコミュニティ、芸術・文化団体、医療現場などで行うことが可能な方法であり、病気の予防から治療・回復に至るまで人生のあらゆる段階で活用することができます。

私たちのCreative Healthに対する定義は、包括的であり具体的でもあります。包括的であるため革新的な実践が可能であり、具体的であるがゆえに英国の文化セクターの確かな専門分野として機能しています。

Creative Healthの重点領域

英国におけるCreative Healthは概ね、予防、治療・回復、急性期ケアの3領域に分類されます。

- 予防では、心身の健康状態の向上に役立つよう、健康的な習慣づくりと、クリエイティビティを生活の中に根付かせることに重点を置きます。
- 治療・回復では、特定の症状や健康上のニーズ（脳卒中からの回復、認知症、精神的な健康状態など）に合うよう対象を絞った介入に重点を置きます。
- 急性期ケアでは、病院などで急性期ケアを受ける人に向けて設計されたプログラムに重点を置きます。

Creative Healthの沿革

Creative Healthはパンデミックをきっかけにその貴重な役割が脚光を浴びるようになりましたが、英国では20年以上前からCreative Healthの重要性が着実に高まってきており、現在では定義も明確になり広く認識されています。多くの芸術団体にとって、それは活動の主要な柱であり、私たちの来館者との関わり方に影響を与えています。私が勤務するダリッチ・ピクチャー・ギャラリーではCreative Healthは私たちのすべての取り組みを貫く大切な理念へと進化し、それによって私たちの活動やコミュニティへの関わり方が形づくられています。

Creative Healthの実践に関する定義が明確化されてきた経緯を示す主な出来事は以下のとおりです。

- 2017年、All-Party Parliamentary Group on Arts, Health and Wellbeingによる画期的な報告書「Creative Health」が発表されました。同報告書内の提言は今なおCreative Healthに関する方針と実践の中核を担っています。
- 2018年、Culture, Health and Wellbeing Allianceが設立されました。この文化セクター支援団体に属する各地域の推進役が、この領域の活動についての優れた実践の普及、有益な研究の共有、幅広い理解の醸成に重要な役割を果たしています。
- 2019年、芸術と健康に関して最大規模のエビデンスをまとめた報告書「What is the evidence on the role of the arts in improving health and wellbeing?」（Dr Daisy Fancourt, UCL）が発表されました。この報告書は3,500を超える発表済み研究の知見を網羅し、世界の人々の健康を支えるうえで芸術が果たしている役割についてその全容を示すことを目指しています。
- 2021年、National Centre for Creative Healthが設立されました。同センターではこれまでに、Creative Healthの活動をする人々と提唱者たちをつなぐネットワークづくりや分野別研究会の立ち上げを行ってきました。

英国内の地域ごとに異なる状況

現在、英国各地に活動拠点が存在し、Creative Healthによって心の健康、コミュニティの結束、社会的公正が生み出されるのを支えるための公共政策や公共機関からの委託が徐々に進んでいます。それらは組織的に拡大してきたのではなく、ほとんどは草の根的なプロジェクトと、献身的なチームの働きによって自然な形で発展してきました。これが地域ごとに異なる実践や支援の提供につながっています。

イングランドでは、健康と社会的ケアに芸術を取り込む包括的アプローチの構築に多大なエネルギーを注いできました。マンチェスターやロンドンのように複数自治体が合同で設立した広域的な行政機構がある場所は主要な活動拠点へと発展し、地域のニーズと健康格差に言及したCreative Healthに関する戦略を策定しています。

また、ウェスト・ヨークシャーとグロスターシャーのIntegrated Care Systemは先を見据えて、Joint Forward Plansの中にCreative Healthを組み込んでおり、コミュニティ・ベースの取り組みの持続可能な発展と拡大を促す強力なインフラと仕組みを整えています。長期的な健康効果の実態を表すのに役立つデータを一貫して収集・整理することや、健康格差を減らす方法についての実践も確立しています。

しかしながら、依然として多くの場所では長期的で持続可能な資金調達が必要であり、地方自治体、医療システム、文化セクター、VCSEセクター（ボランティア団体、コミュニティ、社会的企業）との連携の強化が求められます。Creative Healthの一層の発展のためには政策立案者、資金提供者、委託者、サービス提供者の間でより強い協力関係を築くことも必要です。重要なのは、今年の夏発表されたNHS（国民保険サービス）イングランドの新たな長期計画「10 Year Health Plan for England: Fit for the Future」が、予防やコミュニティ中心のアプローチに重点を置くなどCreative Healthの考え方と一致しているにもかかわらず、芸術については一度も触れていないという点です。芸術がNHSの目標達成に貢献できるよう、文化・健康セクター間で活発な議論が続けられています。

ウェールズ、スコットランド、北アイルランドでは状況が少々異なります。

ウェールズは、Arts Council WalesとWelsh NHS Confederationの間の先駆的なパートナーシップ関係が、持続可能な包括的アプローチをリードしています。各地域の保健局に1名の芸術・健康コーディネーターが配置されています。またウェールズ全体で社会的処方の枠組みが整っており、社会的処方を提供する組織は、医療施設に配置されているだけでなく、一般診療所、第三セクター機関、住宅協会、地方自治体、教育施設などのさまざまな組織に拠点を置いて活動しています。

スコットランドでは、2020年の文化戦略にCreative Healthが組み込まれました。この戦略のビジョンと価値観が今でも重要視されており、ネットワーク組織であるArts, Culture, Health and Wellbeing Scotlandが活動を牽引しています。この幅広い文化戦略は、芸術の変革力を活用しようとしています。健康と同時に教育も、スコットランドにおけるCreative Healthで重要な位置を占めています。独自の教育カリキュラムである「Curriculum for Excellence」によって、文化、健康、教育の連携が促進されています。スコットランドでは、学校グループとクリエイティブ・パートナーが協働して学習者のウェルビーイング向上のための革新的な施策を見つけられるように、専用の資金が用意されています。

北アイルランドでは、the Northern Ireland Creative Health Networkが設立初年度の評価報告書を発表し、次の明確なステップとして、政策に組み込むことができるNorthern Ireland Creative Health Strategyの共同策定に向け動き出しました。この計画は、断片的に行われている活動を整理し、ウェールズやスコットランドからの学びを取り入れながら、Creative Healthを保健システムの中核業務に近づけることを目指しています。

優れた実践のために

Creative Healthという分野が発展するにつれて、この活動の手引きとなる数多くの模範的な取り組み事例や品質に関するフレームワークも生まれています。直近ではCulture Health &Wellbeing Allianceが策定したCreative Health Quality Framework（https://www.culturehealthandwellbeing.org.uk/sites/default/files/Creative%20Health%20Quality%20Framework.pdf）で、安全で効果的なプロジェクト運営について次のような明確な指針が示されています。

品質向上と優れた実践のための8つの品質原則が定められています。

人間中心：個人の経験を尊重し可能性を引き出す

公平：より公正で公平な社会に向けて取り組む

安全：危害を与えず、安全を確保し、リスクを管理する

クリエイティブ：人をひきつけて、ひらめきを与え、変化を生み出す

協働：他者と協力して連携の取れたアプローチを開発する

現実的：何が達成できるのかを現実的に見極める

内省的：反省し、評価し、学ぶ

持続可能：人と地球のために長期的に望ましい影響をもたらす努力をする

このフレームワークでは、どうすればCreative Healthに関わるすべての人々が、これらの原則を受け入れられるのかを考察し、参加者が可能な限り最良の体験と健康成果を得るためには、それらの原則を実践にどのように適用すればよいのかを検討しています。

今回の講演では、英国におけるCreative Healthの定着を主なテーマとして、数多くの事例を取り上げ、さまざまな革新的プロジェクトをご紹介します。これらのプロジェクトを予防、治療・回復、急性期ケアの3分野全体の視点で見ることにより、英国でのCreative Healthの実践について、そしてこの重要な活動の未来について、光を当てたいと考えています。

略 歴

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーのヘッド・オブ・プログラム・エンゲージメントとして、展覧会および教育普及活動を統括。観客とコレクションの間につながりと好奇心を育む参加型の教育普及を専門とする。鑑賞教育の専門家でもあり、企画した２つの展覧会「Rachel Jones: Gated Canyons」（2025）、「Helen Frankenthaler: Radical Beauty」（2021）は批評家から高い評価を得た。大英博物館、国立海洋博物館、ケンウッド・ハウス、ロンドン交通博物館で経験を積み、英国の博物館や美術館における教育普及分野での職歴は19年に及ぶ。

A Spotlight on Creative Health in the UK

Jane Findlay (Dulwich Picture Gallery)

As humans we have always wanted to share and process our lived experience through art – from stories to songs; paintings and performances – we've sought to be seen and heard, and to be connected to one another. The COVID pandemic brought this into sharp focus and once again reinforced the vital role art plays in creating connection and community to enable us to feel and function well.

What is Creative Health for the UK?

In the UK Creative Health is seen a creative approaches and activities that support our health and wellbeing. We consider health in its holistic sense, as a state of complete physical, mental and social wellbeing. And we take a broad approach to creativity. Creative Health activities can include visual and performing arts, crafts, film, literature and creative activities in nature, such as gardening.

Creative health also encompasses creative and innovative ways to approach health and care services, co-production, education and workforce development. It can take place in homes, communities, arts and culture organisations or health settings and can be applied across the life course and ranges from prevention of ill health to treatment and recovery.

Our definition is both extensive, allowing for innovative practice, and specific enabling it to become a real specialism of the UK cultural sector.

Areas of focus in Creative Health

Creative Health in the UK tends to fall into three areas: Prevention, Treatment & recovery and Acute care.

- Prevention focuses on healthy habits and embedding creativity in our lives to help us to feel and function better.
- Treatment and recovery work focuses on targeted interventions for specific conditions or health needs for example, stroke recovery, dementia or mental health conditions.
- Acute care focuses on programme that are designed for people receive acute care such as in hospital settings.

A quick history of Creative Health

Although the pandemic shone a spotlight on the valuable role of Creative Health, in the UK for over 20 years the case for Creative Health has been growing steadily and is now clearly defined and recognised. For many arts organisations, it is a key pilar of their work and informs how we engage with our audiences. Where I work at Dulwich Picture Gallery Creative Health has evolved into the golden thread that runs through all our activities shaping our work and how we work with our communities.

Some key milestones over the recent years towards a defined Creative Health practice include:

- 2017 publication of 'Creative Health', the landmark report of the All-Party Parliamentary Group on the Arts, Health and Wellbeing. Its recommendations are still central to thinking around creative health driving policy and practice.

— 2018 establishment of the Culture, Health and Wellbeing Alliance, a sector support organisation whose regional champions play a vital part in disseminating good practice, sharing useful research, and cultivating a wider understanding of this area of work.

— 2019 publication of "What is the evidence on the role of the arts in improving health and wellbeing?" Dr Daisy Fancourt, UCL. Largest evidence report ever published on arts and health. Covering the findings from over 3,500 published studies, the report aims to give an overall picture of the role the arts play in supporting health globally.

— 2021 the creation of a new National Centre for Creative Health which has built networks and special interest groups for those working with creative health

and advocates for creative health.

A varied picture across the nations

Today, nationally across the UK there are hubs of progressive public policy and commissioning for mental health, community cohesion and social justice that Creative Health has helped to create. Rather than growing systematically they have often developed organically through groundswell projects and dedicated teams. This has led to a patchwork of practice and provision across the nations.

In England there has been a lot of energy into creating a holistic approach that integrates the arts into health and social care. Places like Manchester and London with combined authorities have developed into key hubs with established creative health strategies that speak to local need and health inequality.

There are also forward-thinking Integrated Care Systems (ICSs) in West Yorkshire and Gloucestershire which incorporate Creative Health into their joint Forward Plans and have strong infrastructure and models that facilitate the sustainable development and expansion of community-based initiatives. There is also established practice around collating data consistently which has helped paint a picture of long-term health benefits, and how it can reduce health inequality.

However, we still require long term sustainable funding in many places and greater collaboration between local authorities, healthcare systems and the cultural and VCSE (Voluntary, Community and Social Enterprise) sectors. There is also a need for more co-operation between policymakers, funders, commissioners, and providers in order to create the conditions for Creative Health to further flourish. Importantly, NHS England's new long term plan, 10 Year Health Plan for England: Fit for the Future, announced this summer, although being aligned with approaches to Creative Health with a focus on prevention and community-centred approaches did not mention the arts once. Robust conversations between the cultural and health sector are ongoing to enable the arts to support the NHS' s ambition.

The picture is slightly different across the devolved nations of Wales, Scotland and Northern Ireland. In Wales they are spearheading a holistic and sustainable approach, through a pioneering partnership between Arts Council Wales and the Welsh NHS Confederation. This means that there is an arts and health coordinator in each health board. There is also a national framework for social prescribing and within Wales, organisations offering social prescribing are not just located in health care settings, rather they are based in a range of organisations. For example, GP surgeries, third sector organisations, housing associations, local authorities, or educational settings.

In Scotland creative health is embedded in its 2020 Cultural Strategy whose vision and values remain important, and is spearheaded by Arts, Culture, Health and Wellbeing Scotland. This broad strategy for culture aims to harness the transformational power of arts. Alongside health, education is also a key part of the Scottish Creative Health picture. Their Curriculum for Excellence fosters collaboration between culture, health and education. The country has dedicated funding for school groups and creative partners to enable them to work together to find innovative solutions to increasing learner wellbeing.

In Northern Ireland the Northern Ireland Creative Health Network has published its first year review and set out clear next steps to co-create a Northern Ireland Creative Health Strategy that can be embedded in policy. This plan is designed to address fragmented activity and bring creative health closer to the core business of the health system taking learnings from Wales and Scotland.

Best practice

As the field of Creative health grows there are also a number of best practice models and quality frameworks that have been created to guide the work. Most recently the Creative Health and Wellbeing Alliance's Creative Health Quality Framework (https://www.culturehealthandwellbeing.org.uk/sites/default/files/Creative%20Health%20Quality%20Framework.pdf) offers clear guidance on how to deliver safe and effective projects.

It is built around eight Quality Principles which drive quality and good practice:

Person-Centred: Value lived experience and enable potential.
Equitable: Work towards a more just and equitable society.
Safe: Do no harm, ensure safety, and manage risk.
Creative: Engage, inspire and ignite change.
Collaborative: Work with others to develop joined-up approaches.
Realistic: Be realistic about what you can achieve.
Reflective: Reflect, evaluate, and learn.
Sustainable: Work towards a positive, long-term legacy for people and planet.

The framework looks at how these principles might be adopted by everyone involved in Creative Health and explores how they might be applied to practice to support the best possible experience and health outcomes for participants.

In this talk alongside highlighting the establishing of Creative Health in the UK I will provide a number of case studies to illustrate a wide range of innovative projects. Looking across the three areas of prevention, treatment and recovery and acute care, these projects will shine a light on practice in the UK and what the future holds for this vital work.

【発表趣旨】「クリエイティブ・ヘルス・シティの構築：ロンドン市のアプローチ」

発表者：クレア・ラヴォット（英国）

所属：グレイター・ロンドン・オーソリティー（英国）　職名：プロジェクト開発担当主席

ロンドンのDNAには文化が深く根付いており、そのおかげでクリエイティビティ（創造性）の力を健康と、ウェルビーイングのために活かす、またとない機会が訪れています。何世紀もの間、ロンドン市民の生活を豊かにしてきた芸術と文化は、今日では、より健康的でより公平な都市に不可欠な要素としてみなされることが多くなっています。

2024年、Greater London Authority（以下GLA）の委託により、Dr. Rebecca Gordon-NesbittとLondon Arts and Healthの画期的な報告書「Understanding Creative Health in London」が作成されました。この報告書は、1700年代に起源を持ちロンドンに深く根付いたCreative Healthの伝統を明らかにするとともに、現在の私たちの生活に変革をもたらしている先駆的なプロジェクトを顕彰する内容となっています。Creative Healthには、ロンドン市民が生まれ、育ち、働き、年を取っていく環境の中にクリエイティビティを根付かせることによって、心身のウェルビーイングを高める活動が含まれています。このような活動が、病院、ミュージアム、図書館、劇場、公園、コミュニティ拠点といったさまざまな場所で行われ、認知症、パーキンソン病、コロナウイルスの後遺症、依存症を患う人や心の健康に問題を抱える人を支えています。

このように豊かな伝統があるものの、障壁も依然として存在しています。ロンドン全体で約3万人のフリーランスのアーティストが活動していますが、彼らの多くは収入がLondon Living Wageを下回っており、持続可能な資金源がほとんどありません。

体系的な投資が行われておらず、ロンドン市民、特に最も弱い立場にある人々がCreative Healthに公平にアクセスできる状態ではありません。こうした課題に対処することが、ロンドン市長によるHealth Inequalities Strategyとすべての政策において健康を考慮するアプローチであるHealth in All Policiesの中核であり、文化は予防とエンパワーメントの推進力として位置付けられています。

GLAのCulture, Creative Industries and 24 Hour London Unitは次の3つの優先事項にフォーカスしたプログラムを主導しています。

- **文化による社会的処方：**プライマリ・ケアとコミュニティサービスの中で芸術と文化を提唱すること
- **Dementia-Friendly London：**Dementia Friendly Venues Charterを実行し、世界初の認知症フレンドリーな首都となること
- **メンタルヘルス：**心の健康、特に若年層のロンドン市民の心の健康を向上させること

報告書「Understanding Creative Health in London」は、arts-in-health活動の規模、成熟度、質を重要なエビデンスとして提示し、行動を呼びかけました。この報告書の発表は、次のような大きな政策転換を予期させるものでした。2025年7月に英国政府が発表した「Fit for the Future: 10-Year Health Plan for England」では、以下の3つの変革目標が設定されています。

1. **病院からコミュニティへ：**自宅により近い場所でケアを行うこと
2. **アナログからデジタルへ：**テクノロジーの活用により、効率とアクセシビリティの向上を図ること
3. **病気から予防へ：**早期介入と健康状態の向上を優先的に選択すること

Creative Healthは、これらの目指す方向性と強く合致しています。自宅に近い保健システムの中に文化的要素を組み込むことで、ロンドンは予防、コミュニティ・ベースのケア、全人的ウェルビーイングの分野で先頭に立つことができます。このビジョンは、パートナーであるArts Council England、National Centre for Creative Health、Culture, Health and Wellbeing Alliance、London Arts and Healthなどとの連携によって支えられています。

私たちの発表では、ロンドンがCreative Health Capital Cityになるために、どのように文化資産を活用しているのかを取り上げます。GLAが変化し続けるヘルスケア環境の中で、システム上の課題に対処し、持続可能な仕組みを提唱し、機会を最大化するために行ってきた活動から得た知見をお伝えします。参加者の皆さんには、文化、健康、コミュニティというセクター間の枠を超えた協働によって、どのように格差を減らし、市民を励まし、より健康な都市の未来を作ることができるのかについて、理解を深めていただけると思います。

ロンドンのこれまでの歩みが、クリエイティビティは贅沢ではないということを証明しています。それは健康で力強いコミュニティに必要なものです。Creative Health Cityを作ることで、すべてのロンドン市民に文化が持つ変革の力を解き放つことができるのです。

略 歴

ロンドン市庁の文化・健康・ウェルビーイング部門の責任者で、Culture, Creative Industries and 24 Hour London Unitに所属。ロンドン市長が推進するDementia Friendly Venues Charterを担い、ロンドンの若者のメンタルヘルスと文化的社会的処方を支援し、Creative Healthの専門知識をロンドンの医療システムに組み込む活動を行っている。ロンドン市庁に入庁する前は、First Penguinを設立し、文化機関において市民参加を活動の中心に据える取り組みを推進した。Spitalfields Music、The Place、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、Nesta、Arts Council Englandで上級職を歴任し、一見不可能に思えることを実現することに情熱を注ぐ。

Building a Creative Health City: A London Approach

Clare Lovett（The Greater London Authority）

Culture is in London's DNA, and with it comes a unique opportunity to harness creativity as a force for health and wellbeing. For centuries, art and culture have enriched the lives of Londoners, and today, they are increasingly recognised as vital components of a healthier, fairer city.

In 2024, the Greater London Authority (GLA) commissioned Understanding Creative Health in London, a landmark report by Dr. Rebecca Gordon-Nesbitt and London Arts and Health. This research revealed the city's deep-rooted tradition of creative health, tracing its origins back to the 1700s and celebrating the pioneering projects transforming lives today. Creative health encompasses activities that improve physical and mental wellbeing by embedding creativity into the environments where Londoners are born, grow, live, work, and age. These interventions support people living with dementia, Parkinson's disease, long COVID, addiction, and mental health challenges, delivered in settings as diverse as hospitals, museums, libraries, theatres, parks, and community hubs.

Despite this rich heritage, barriers remain. Around 30,000 freelance arts practitioners work across London, yet many earn below the London Living Wage, and sustainable funding is scarce. Without systemic investment, equitable access to creative health for all Londoners, especially the most vulnerable, cannot be achieved. Addressing these gaps is central to the Mayor's Health Inequalities Strategy and Health in All Policies approach, which positions culture as a driver of prevention and empowerment.

The GLA's Culture, Creative Industries and 24 Hour London Unit has been leading a programme focused on three priorities:

- **Cultural Social Prescribing:** Advocating for arts and culture within primary care and community services.
- **Dementia-Friendly London:** Delivering the Dementia Friendly Venues Charter and creating the world's first dementia-friendly capital city.
- **Mental Health:** Promoting better mental health, particularly among younger Londoners.

The Understanding Creative Health in London report provided critical evidence of the scale, maturity, and quality of arts-in-health activity and issued a call to action. Its publication anticipated a major policy shift: the UK Government's Fit for the Future: 10-Year Health Plan for England (July 2025), which sets out three transformative goals:

1. **From hospital to community:** Moving care closer to home.
2. **From analogue to digital:** Harnessing technology for efficiency and accessibility.
3. **From sickness to prevention:** Prioritising early intervention and healthier choices.

Creative health aligns powerfully with these ambitions. By embedding culture into neighbourhood health systems, London can lead the way in prevention, community-based care, and holistic wellbeing. This vision is supported by a coalition of partners, including Arts Council England, the National Centre for Creative Health, the Culture, Health & Wellbeing Alliance, and London Arts and Health.

Our presentation will explore how London is leveraging its cultural assets to become a Creative Health Capital City. We will share insights from the GLA's work to address systemic challenges, advocate for sustainable models, and maximize opportunities within the evolving health landscape. Delegates will gain an understanding of how cross-sector collaboration between culture, health, and community can reduce inequalities, empower citizens, and create healthier urban futures.

London's story demonstrates that creativity is not a luxury; it is a necessity for thriving communities. By building a Creative Health City, we can unlock the transformative power of culture for every Londoner.

【発表趣旨】「コレクションを共有し、帰属感を分かち合う：健康を支え、人生を変える」

発表者：ミッチ・ロバートソン（英国）

所属：ビーニーハウス博物館・図書館（英国）　職名：プログラム・アンド・ミュージアム・マネージャー

カンタベリーの歴史的なハイストリートにあるビーニー（The Beaney House of Art and Knowledge）は、美術館、観光案内、図書館を1つの建物にまとめた市立のミュージアムで、毎年35万人以上が訪れます。

ビーニーはこの13年間で、単なる収蔵作品の管理者から、健康とウェルビーイングの推進者へと、その役割を再定義してきました。

今回の発表では、ビーニーが革新的なプロジェクトとパートナーシップを通じ、実践の中にウェルビーイングを組み込んできた過程について詳しく見ていきます。その道のりは2013年のPaper Apothecary Projectに始まります。それは、幸福とマインドフルネスの向上を目指す「文化的処方箋」を通じて、来館者に収蔵作品に親しんでもらうプロジェクトでした。立ち止まって絵の細かいところを観察したり、館内のエレベーターで踊るなどの遊び心のある仕掛けをしたりと、さまざまな活動を行いました。このプロジェクトの参加者の96%が「気持ちが高まった」と報告しており、ビーニーがウェルビーイングを支援する潜在力を持っていることが証明されました。

このプロジェクトの成功を基に、ビーニーは、若年性認知症を抱える人とそのケアをする人たちが集まる月例グループPower of the Objectを立ち上げました。このプログラムでは、収蔵作品を手に取ったり、テーマごとのワークショップを開いたりして、会話を促し、認知的な刺激を与え、息抜きができるようにしています。それを補完する形で始めたSinging for Wellbeingでは、音楽の治療的な力を活かして、参加者の発話の流暢さ、記憶力、自信を高めています。その成果は、Canterbury Wellbeing Scaleを使って測定され、信頼性の高い評価が行われています。

常に重視しているのは、アクセシビリティと包摂性です。10年以上前に始めたSensing Cultureという取り組みでは、視覚障害者のために、触覚を使ったツアーやアーティスト主導のワークショップを開催しており、視覚障害者の孤立を和らげクリエイティブな表現を可能にしています。それらのセッションを通じて創作された芸術作品はミュージアムのコミュニティ・ギャラリーに展示されており、参加者の発言や成果を承認しています。

ビーニーは、孤独による人々の健康上の問題が拡大していることを認識し、1年半をかけて、収蔵作品を、より多様な人々やコミュニティの声が反映され、身近で関連性のあるものにする取り組みを行いました。そのMirror Mirror Projectでは、カンタベリーの歴史を形作った人物を公募し、若手アーティストに肖像画の制作を委託しました。それらの肖像画をコレクションに加えることで、多様性と帰属感を尊重することへの永続的なコミットメントを示しています。

デジタル革命はこの主潮を一層強化しています。Listen Here, Listen Anywhereのプログラムでは、主な作品を音声で説明します。視覚障害者がキュレーションを行い、来館できない人々のためにリモートでの参加が可能となっています。

本講演ではビーニーのアプローチの理論と実践の礎（いしずえ）について、ストレスと孤独の軽減や認知機能の向上などの測定可能な効果に重点を置き、詳しく考察します。この活動の中心にあるのはミュージアムのコレクションそのものです。

作品は受動的に存在する展示物ではありません。作品は、人々をつなぎ、記憶を呼び起こし、意味を生み出すための、強力な手段です。作品に主体的に関わることで、好奇心が刺激され、その人自身の人生の物語が呼び起こされ、認知機能や情緒が豊かになる体験を得ることができます。認知症を患っている人たちにとって、

歴史的な作品を手に取って触れる体験は、記憶を解き放ち会話を促すことにつながります。社会的に孤立している人々にとって、他者とともに芸術や文化遺産と出会う体験は、帰属感とアイデンティティ（自己認識）を得ることにつながります。

ミュージアムで働く専門家として、私たちは特別な責任を担っています。コレクションがどのような人にもアクセス可能で身近に感じられるものにするという責任です。これは、従来の展示の枠を超えて、包摂的な解釈、クリエイティブな関与、コミュニティとの共同制作を取り入れることを意味します。参加と対話を促しながら作品を共有することで、ミュージアムは、ウェルビーイングの推進者となり、人々が文化によって知識だけでなく、癒し、勇気、つながりを得られる場所となることができるのです。

参考資料

ビーニーの公式サイト：
Health & Wellbeing in Museums Toolkit - Canterbury Museums & Galleries
（本資料の内容は、Canterbury Museums and Galleries（2021年）の著作物です。）

文化・健康・ウェルビーイング連盟（事例研究や有益な助言が得られます）：
Culture Health and Wellbeing Alliance

カンタベリー・ウェルビーイング尺度（認知症患者のウェルビーイングを評価するツール）：
Canterbury Wellbeing Scales: directions and scales

略 歴

25年以上にわたり文化セクターにおいて、アーティストや芸術団体を支援。最近では、ビーニーハウス博物館・図書館（The Beaney House of Art & Knowledge）を含むCanterbury Museums & Galleriesのチームの一員として活動している。ビーニーハウス博物館・図書館では、包括性を重視し、さまざまな背景をもつ人々が博物館のコレクションに有意義な形で関われるよう努めている。認知症を抱える人たちを支援する取り組みを含め、博物館をすべての人にとって居心地の良い空間にすることを目的とした数多くのプロジェクトを主導。彼女の情熱は、つながりやエンパワメント、そしてウェルビーイングを育むためのツールとして、コレクションを共有することにある。

Shared Collections, Shared Belonging: Supporting Health and Transforming Lives

Mitch Robertson (The Beaney House of Art & Knowledge)

The Beaney, located in Canterbury's historic High Street, is a municipal museum that combines galleries, visitor information, and a library under one roof. Welcoming over 350,000 visitors annually, it has spent the past thirteen years redefining its role, not simply as a custodian of collections, but as an active agent for health and wellbeing.

This presentation explores how The Beaney has embedded wellbeing into its practice through innovative projects and partnerships. The journey began in 2013 with the Paper Apothecary Project, which invited visitors to engage with collections through “cultural prescriptions” designed to boost happiness and mindfulness. Activities ranged from pausing to notice details in a painting to playful prompts like dancing in the museum lift. The project demonstrated the museum's potential to support wellbeing, with 96% of participants reporting improved mood.

Building on this success, The Beaney launched **Power of the Object**, a monthly group for people living with early-onset dementia and their carers. Using handling collections and themed workshops, the programme fosters conversation, cognitive stimulation, and respite. Complementing this, **Singing for Wellbeing** harnesses the therapeutic power of music to improve verbal fluency, memory, and confidence. Outcomes are measured using the Canterbury Wellbeing Scale, ensuring robust evaluation.

Accessibility and inclusion remain central. For over a decade, **Sensing Culture** has provided tactile tours and artist-led workshops for blind and partially sighted participants, reducing isolation and enabling creative expression. Artworks produced through these sessions have been exhibited in the museum's community gallery, affirming participants' voices and achievements.

Recognising the growing public health challenge of loneliness, The Beaney undertook an 18-month initiative to make its collections more representative and relevant. The **Mirror Mirror Project** invited the community to nominate individuals who shaped Canterbury's history, resulting in newly commissioned portraits by emerging artists. The accessioning of these portraits into the permanent collection signals a lasting commitment to diversity and belonging.

Digital innovation further extends this ethos. Programmes such as **Listen Here, Listen Anywhere** provide audio descriptions of key objects, curated by visually impaired participants, enabling remote engagement for those unable to visit physically.

This talk will examine the theoretical and practical foundations of The Beaney's approach, highlighting measurable benefits, from reducing stress and loneliness to enhancing cognitive function. Central to this work is the museum's collection itself.

Objects are not passive artefacts; they are powerful tools for connection, memory, and meaning making. Engaging with collections stimulates curiosity, evokes personal narratives and provides cognitive and emotional enrichment. For individuals living with dementia, handling historic objects can unlock memories and foster conversation. For those experiencing isolation, shared encounters with art and heritage create a sense of belonging and identity.

As museum professionals, we hold a unique responsibility: to ensure these collections are accessible and relevant to everyone. This means moving beyond traditional display to embrace inclusive interpretation, creative engagement and co-production with communities. By sharing collections in ways that invite participation and dialogue, museums can become active agents of wellbeing and spaces where culture not only informs but heals, empowers and connects.

【事後アンケート】

質問　以下の①から⑤について、感想（気づきや発見、気になったキーワードなど）をお聞かせください。

①ジェーン・フィンドレーさんの報告

○予防、治療、急性期の領域の3つに対して博物館、芸術が役割を果たしていることに驚きました。特に、急性期の領域については、非常に難しい点もあると思うのですが、医療空間そのものを変革して、芸術に触れられるよう工夫されていることがすばらしいと感じました。

○「私たち人間はいつの時代でも、物語や歌、絵画、パフォーマンスなどの芸術を通じて自らの人生で体験した出来事を共有し意味づけをしたいと願ってきました。私たちは他者に見てもらい聴いてもらいたい、そして互いにつながり合いたいという想いから、そのような芸術表現を行ってきたのです」という冒頭の内容が印象的でした。私は人の願いや想いこそが本当に尊いものだと信じています。だからこそ、芸術活動の源泉が人の心であるという、今回のフレーズに強く共感いたしました。また、芸術が人を集め、人を癒すのは、心が中心になっているからかもしれないと思いました。

○Creative Healthの概要がよく分かりました。ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーで普及事業が運営の中核として根づいている点が印象的でした。

○Fancourt先生の話や、Creative Health Quality Frameworkも教えて頂き、大変参考になりました。言語化すると、人々が目標を立てやすくなり、アプローチの方法が具体化され、こうして一丸となって取り組みやすそうだと思いました。

○NHSイングランドの新たな長期計画が、予防やコミュニティ中心のアプローチに重点をおくなどCreative Healthの考え方と一致しているにもかかわらず、「芸術」については一度も触れていないという点がとても気になっています。

○予防、治療、回復それぞれのフェーズに、アプローチする仕組みがすでに構築されている点に、イギリスの20年の時間の厚みを感じました。たくさんの取り組みをご紹介いただきましたが、特に「Hospital Rooms」につきまして、私が精神科や院内学級の入院患者へのアプローチ方法について情報を集めておりましたので、大変参考になります。まだ少ししか動画を視聴しておりませんが、アーティスト本人が自身の制作について紹介し、かつ制作のコアな部分を、簡単な材料と道具で疑似体験する方法までレクチャーしてもらえる動画は、とても見応えがあります。

○イギリス内部でのCreative Healthの実践について，国内でも地域間での違いがあること，また予防期・治療期・急性期での領域の違いがあることを知ることができました.

○完成品をつくるのではなく、ドローイングを経験するという「過程」を得るプログラムは、参加者自身の自走力を養う機会にもなるのではないかと感じました。また、「Creative Healthという言葉すらなくなるくらい当たり前の社会にしたい」という言葉も、強く心に残りました。

○国際組織に発展するまでには、草の根的プロジェクトと献身的なチームの働きがあったということに感動しました。それ故に生まれた地域ごとの多様性が、国家規模の発展の元になっていると理解しました。

○「芸術表現は他者に見てもらいたい、他者とつながりたいという思い」という点で、美術館は「制作された作品を見せる」という場所としての認識がつよく、「作り出す場」という認識はまだまだ薄いと感じています。「作り出す場」となれば、もっと様々な人がつながり、行きたくなる場になっていく可能性があると思います。しかし、現在の「学芸員」という職種のスタッフでは（人数だけでなく、専門として）やりきれず、アイデアが出ても実践されていかない現実があると感じています。だからこそ、今回のお話のように、協働が必要ですね。

○Creative Healthが20年以上も前からイギリスで重要性が認識されていたことや、2019年の段階で芸術と健康に関する最大規模のエビデンスがまとめられた報告書が発表されたことに驚くばかりです。パンデミックの間に、様々な実践がなされたことにも、ただパンデミックを否定的なものと捉えない前向きな取り組みに敬服するばかりです。8つの品質原則については、どの分野にもあてはまりますが、人間中心、クリエイティブ、協働、現実的、内省などのキーワードから改めて気づきを得ました。

○Creative Healthの活動が、草の根活動で発展してきたということで、何事も理解してもらうためには、こつこつと時間をかけてやっていくのが大事なのだと感じました。

○Creative Healthというこれまであまり意識してこなかった活動について、いろいろ教えていただきました。英国という成熟した欧米文化圏ならではの、積極的な活動に素晴らしいと思いました。新型コロナのパンデミック後、心身が疲弊した住民のケアということで地域ぐるみで政治力も加担して進めていくやり方はすごいと思いました。この事例を日本でもできれば、もっと有効な博物館活動ができるのにと思いました。

② クレア・ラヴォットさんの報告

○アーティストたちがCreative Healthを通して、活動の幅を広げられるような取り組みがあることが分かりました。情報の共有方法も、シンプルかつ手短に行うことが大事だと実感しました。

○市長が主導して全庁的に取り組んでいる、ロンドンの事例が興味深かったです。どんなこともそうだと思いますが、トップの積極的な姿勢や関係者の連携が施策を前進させる力になっていると感じました。

○「全ての人が文化にアクセスできるように」という言葉に勇気づけられました。私はバリアフリーやアクセシビリティといった概念を大切にしております。だからこそ、それらを端的で力強く表現された今回のフレーズが心に残りました。

○「Residence is futile」や、「Be humans（コメント欄で）」と言われていたのが印象的でした。イギリスは動きがはやい、と思いますが、そうしたマインドを備えている方々もそもそも多いのでは（日本よりも多い？）と思いました。短く、誰もが口にできる言葉を用意していきたいです。

○ロンドン市民にとって、芸術があったらいいものから、必要なものになっているということ。理想が現実になっていることに勇気づけられます。40人の仲間がチームとなりコミュニティを組織化し、行政とともに立ち上がっていったということ。チーム内の役割分担、組織化についてもう少し詳しく知りたいと思いました。

○エネルギッシュなお話しぶりに、とても活力をいただけました。近年、展示室や美術館・博物館の空間利用について、日本では「リラックス」や「ゆったり」という言葉がよく聞かれるように感じますが、「messy」にまで踏み込もうとされる姿勢は素晴らしいと思います。お話しされていたように、地域住民よりも館内職員の理解を得ることに時間を要しそうではありますが、博物館、美術館という空間の可能性について、新しい視点をいただけました。

○ロンドンではすでに、自治体も含めたWellbeing・Creative Healthに関わる取り組みが行われていることに驚くとともに、若いアーティストが平均収入以下での活動を強いられている実態を知ることができました。

○「ロンドンがCreative Health Capital Cityになるために」、市民の健康が、市の未来を支えていくこと、そこに文化資産が大いに活用できることが認識されていることが素晴らしいと思いました。日本では、美術館・博物館は現在「観光施設」＝収益を上げる施設という認識へと変わってきており、「稼ぐ」ことを求められます。「稼ぐ」ことも無視できない現実、それにより文化資産の享受に格差が生まれる懸念、そうした課題をどうクリアしていくのかといったことを考えました。

○クレアさんからは、芸術文化による社会的な処方や認知症患者に優しい取り組み、若年層を中心としたメンタルヘルスの向上に、日本と同様の課題を海外でも抱えていることを改めて認識しました。世界で共通する課題の一つであり、博物館浴のような取り組みをどんどん日本でも展開する時期にきていると実感しました。また、情報社会の進展に伴い、デジタルコンテンツの必要性、また高齢者でも使いこなせるようになる社会の取り組みもより大切になってきていると日々感じています。コミュニティの必要性についても、つながりの大切さを認識しました。地域ケアを健康戦略に組み込むための、非常に重要な要素になり得ると感じています。

○地域医療との連携ということで、公民館などで行われているミニデイ（看護師さんによる健康状況聞き取りや体操などを実施）と連携できそうだと思いました。

③ ミッチ・ロバートソンさんの報告

○若者目線でデザインを行うことが大事なことが分かりました。街には3つの大学があり、若者たちが美術館等でアートに触れているけれど、今後、よりも多くの若者を街に呼びたいという意欲、Creative Healthの更なる可能性を感じました。

○「どんな人でも芸術に触れられるように」という言葉が印象的でした。垣根を作らず、また、どんな人も受け入れられる環境を作るために教育を充実させるなど、迎え入れる側のスタッフへのフォローもしっかりとされている点がすばらしいと思いました。

○「肖像画をコレクションに加えることで、多様性と帰属感を尊重する」という内容が印象的でした。芸術活動と帰属感の関連性については考えたことがなかったので、ミッチさんの報告は特に新鮮な視点で学ぶことができました。

○コレクションを共有することで、人々の健康を支える実践には説得力がありました。現在の自分の活動との乖離を実感し、公立美術館に在籍していた頃の問題意識を思い出しました。

○最初に何をみるかの誘導があることは、面白いと感じました。歌の効果など、環境に応じていろんな効果を詳しく知りたいですね。日本の未病対策にもなり得ると感じました。

○Paper Apothecary Projectから始まったプロジェクトの進化は、素晴らしいと感じました。作品が収蔵品に終わらず、作品が中心となりそこから新たなものが生まれたり、つながったりしていく過程こそ、芸術の役割なのではないかと思いました。

○「Mirror Mirror Project」は地域のコレクションと地域住民とをつなぐ、大胆なプロジェクトで驚きました。帰属意識を高めるというとても大きな目的でありながら、博物館からの問いかけに対して、利用者自身が考え、リアクション（投票）する仕組みは投票→肖像画制作→収蔵というプロセスとともに利用者にとってもシンプルで分かりやすく、参加意欲をそそるものであるように思います。

○地域をどう巻き込んでいくか、地域の方に収蔵品に親しんでもらうだけではなく、収蔵品を一緒に作っていく姿に、これから目指すべき形を見ることができました。

○地域に貢献した人物を公募し、その肖像画を新たな資料にしていく手法については、つながりから生まれる資料という考え方に温かみを感じました。同時に、参加者が「自分はどんなつながりを感じているのか」をさらにシェアできれば、つながりがつながりを呼ぶ空間になっていくのではないかと想像し、高揚しました。

○図書館がウェルビーイングを届ける場になっている事例から、博物館に限らずウェルビーイングのステークホルダーになりうる場所は他にもあるのではないかと思いました。普段博物館にまだ触れる機会が少ない方にとって、「普段行く場所」がウェルビーイングな場として機能し、そこから地続きで博物館のポテンシャルも認知されていくような循環が生まれたら素敵だと感じました。

○年間35万人が訪れるという市の施設の存在にまず驚きました。参加を促すプログラムの実施は、その時に終わらず、将来まで続く（帰属感が生まれるなど）要素を持つべきことが理解されました。

○「帰属感を分かち合う」というタイトルにもありましたが、「帰属感」が大切な言葉だと思います。特に、地域の博物館・美術館は、その地域の人たちに「自分たちの場所」と感じてもらえることから存在の意義が生まれてくる―当たり前のような考え方が、時として忘れられている現実に直面しているだけに、印象に残る言葉となりました。来館者が絵画を見ることで、絵画を描いた人やその背景といったことではなく、幸せな時間を過ごす、感じる、思い出すといった体験を促す取り組みなど、ミッチさんのお話とビーニーでの取組みについては関心を持っております。

○ミッチさんは、美術館・観光案内・図書館がひとつになったミュージアムでの活動から、アクセシビリティと包摂性の重要性を説いてくださったことが印象的でした。美術館の所蔵作品から、健康と人生を変えていく取り組みは本当に素晴らしいものです。つながる、学び続ける、気づくことのキーワードは、私たちが生きていくうえで欠かせないものだと思うと同時に、私自身もそうありたいと思っています。

○「Paper Apothecary Project」というプロジェクトでは、視覚的に、海外の薬屋さん！というビジュアルでとてもわくわくしました。沖縄だと商店や駄菓子屋（まちやぐぁー）っぽくしたらウケるかもしれません。

○「Paper Apothecary Project」や「Singing for wellbeing」など具体例を紹介され、評価方法もCanterbury Wellbeing Scaleを使って評価データを残していて徹底しているなあと思った。現場で実際に体験してみたいと思った。

④ 質疑応答（ジェーンさん、クレアさん、ミッチさんの回答など）への感想

○3人のスピーカーそれぞれの方が、違う機関に所属していながらも、「つながり」を持っていることを感じました。皆さんの話し方がすごく優しくて、相手に対して思いやりや尊重の態度で接しているように感じられました。時に「スローペース」になることも大事だけれど、考えることをやめずに思い立ったらすぐに行動することが大事なことだと改めて感じました。

○「彼らのためにではなく、彼らと共に築く」「どうして来ないのかを"理解したい"」といった言葉が印象に残りました。利用者や参加者ではなく、共同者として尊重されている姿勢に感動いたしました。

○三者が互いの活動に敬意と理解を持ち、国全体で取り組まれる姿勢が伝わってきました。若い世代をもっと多く巻き込みたいという、ミッチさんの言葉が印象に残りました。

○課題に対してねばり強く取り組み、理解の促進に向けたアクション、人々とのつながりを重視する姿勢は課題解決に向けて大切であることをあらためて気づかせていただきました。

○博物館のタイプは様々にあるように、様々な取り組みがWellbeingに繋げられると思いました。実際、ロンドンでgreenとかblueと呼んでテーマごとにそれがなされているのかな、と思いましたので、ぜひ参考にしていきたいです。

○障壁があることは当然なことだと感じていましたが、前に進めるということを力強く思いました。若者が「ありのままでいられる場所」が気になりました。日本には「不完全さも許される文化」として詫び寂びがあるとおっしゃったクレアさんの言葉が心に残っています。

○行政や医療機関、アーティストとの協働する際のポイントについて、「共通言語で話す」と言われたことが印象的でした。私は、共通言語を探ること、ひいては相手の専門領域を知るところから始めるべし、ということかと理解しました。お三方がプロジェクトチームや関係者と、非常に丁寧にコミュニケーションを重ねてこられたのだと感じ、その姿勢を見習わなければと背筋が伸びました。

○SNS活用についても、情報発信ツールとしてだけでなく、博物館に来ない若者の潜在ニーズを可視化するツールとして捉える視点が、とても参考になりました。

○「受付、警備など現場スタッフとの早期共有が必要」とのご意見が大変貴重だと思いました。組織で何かに取り組むときは、最も必要なことであると改めて実感し、ご経験の中から生じた言葉としてありがたく受け止めました。

○質疑応答の最後の方で出てきた「Slow thinking space」という言葉も、キーワードだと思いました。つながりを持って行くためにも、そういう場が大切だと思います。

○皆さんが試行錯誤の中、いろいろな活動や取り組みを行なっているということで、そこは私たちとも変わらないのだと、自分たちもできるかもしれないという気持ちになりました。勝手に環境が恵まれているのだろうなと思っていたところがあったので（予算面や上司の理解など）。

⑤ 今回の国際シンポジウムをもとに、今後自分たちの活動で取り組んでみたいこと

○来年度は、引きこもり児童のサードプレイスとして美術館を活用してもらえるよう取り組む予定です。また、障害者の方がもっと気軽に参加できるような取り組みにも取り掛かりたいと思います。

○博物館を併設する宗教施設として、人や地域を支える場の可能性を、現実とのギャップも含めてあらためて考えたいと思いました。

○領域横断による研究を推進することは困難な面もあるが、エビデンスを明示し、社会や他者にとっての有益性を含めた提案ができるよう、対話とつながりを大事にしながらデータを蓄積したいです。

○"Nothing that's worthwhile is ever easy." を合言葉に、私も自分なりに進めていきます。

○博物館の実践や価値を言語化・フレームワーク化して、社会に共有することの重要性を再認識しました。地域市民にとって、「この博物館があって良かった」と思われ、同時に地域外の人にも「この街に住みたい」と感じさせる博物館づくりに取り組みたいと思います。

○私は一般市民としての感覚しかありません。でも、このままではいけないということだけは強く感じております。大人でさえ生きづらい現代、子どもたち若者たちの心が解放される場所はあるのでしょうか？デジタル化を否定するわけではありませんが、人として生きていくための時間（もう少しゆっくり）、つながり（人、自然、もの）が必要なのではないかと思います。まずは地域に根付いた文化、芸術に触れること、そこを基盤に人々が繋がっていくことは出来そうです。

○当館では大学博物館として、学生とともに博物館活動を実施してきましたが、近年では地域（市）と協働での事業を実施するなど、地域博物館としての役割も増してきていると考えています。地域の中では大学は敷居の高い場所で、敷地内に自由に入れることを、近くにお住まいの方ですらご存じないこともあります。まずはその垣根を取り払いつつ、子ども達や地域の方がもっと利用しやすい場を作っていきたいと思います。そして当館では、今年20周年を迎えるにあたり展示更新を実施している最中ですが、その中では子ども達に展示物やパネル作成をお願いしている箇所もあります。この活動も、Creative Healthの一つとしてとらえて、地域と「一緒に」良いものを作っていくことを、まずは実践したいと思います。

○仲間づくりやエビデンス構築のノウハウも学びが多く、特に「単に集めるのではなく、誰に届けるかを見越してエビデンスを集める」という姿勢は、自分の活動にも取り入れていきたいと思います。

○実験結果による具体的な数字や理念・基本姿勢は（具体例の中に浮かび上がる普遍的問題・成果・理念とともに）、公立私立に関わらず、美術館として学ぶべきであり、生かせるものと思われました。弊館は箱根という温泉地にありますので、立地を生かした独自の方向性が探れないかと思いを巡らせております。

○"Nothing that's worthwhile is ever easy."という言葉が最後にあり、英国でも決して平たんな道のりではなく、諦めてしまいたくなる状況もあったからこその言葉だと思います。諦めてはいけない、という気持ちが大切であることを改めて感じました。

○私はこれまで、「誰もが楽しめる美術館」とい言葉を使ってきました。しかし、今日の講演を聞いて、これからは「健康を支える美術館」という言葉も使って話していきたいです。

○まずは当館の展示内容や取り組みを知ってもらうことからだと思うので、学校や地域（公民館、福祉施設）などに教育普及や生涯学習となるプログラムを導入したいです。幸いにも当館には図書室が併設されており、子どもたちが毎日走りまわっている環境にありますので、まずはその子たちが楽しめるようなロビー展をやりたいと考えています。